

あふろろ

第 1 号

平成 11 年 5 月

都高等学校性教育研究会

目 次

は じ め に	あいさつ 発刊によせて	会 長 前会長	黒瀬 忠生 小田島正門	-----	1
活 動 報 告	月例研修会 役員会・理事会	事務局長 事務局	川端 洋介 井谷 亨	-----	2
公 開 授 業	「理科における性教育」	授業者	榎 茂喜	-----	3
授 業 実 践	「集団の健康」－エイズ	授業者	山元 和三	-----	1 1
中・高合同研修会	「青少年の性の逸脱行動について」			-----	2 2
都性研研修会等	第19回宿泊研修会報告			-----	2 3
	第19回研究大会報告			-----	2 5
	都性研 宿泊研修会報告			-----	2 7
第28回全国研究大会報告		提案者	井口 一成	-----	2 9
第8回関東甲信越静岡研究大会報告		提案者	矢野美智子	-----	3 1
投 稿 論 文	「思春期学と私」	投稿者	竹井 操	-----	3 4
組 織	会 則			-----	3 8
	役員名簿・会員校名簿			-----	3 9
あ と が き		副会長	小泉 功	-----	4 0

は じ め に

あ い さ つ

高性研会長 黒瀬 忠生

平成10年度は、我が高性研が高研連に加入できた記念すべき年であります。そこで、これまで途切れていた会誌「あふるる」を発刊することになりました。

性教育に関心のある教員が自主的に集まり地道な研修を続けている会ですが、その研修内容は、全国的にも高く評価され、関ブロや全国大会などで、必ず発表の機会を与えられ多くの会員がその任を果たしてきています。

セクシュアリティという言葉をよく耳にするようになりました。セクシュアリティとは「人間の身体の一部としての性器や性行動のほか、人格と人格の触れ合いの全てを包括するような幅広い性概念」だそうです。

戯れにこんなことを考えてみました。お互いに素敵に生きるには、自分を磨いて、まず、自分の人格を高め、その高まった？自分で相手と接する。その触れ合いを通して、相手の人格も高められたら素晴らしい。

さらに、高められた相手の人格に接することにより、自分自身が高められたら、もっと素晴らしい。

男である人格と女である人格を互いに尊重仕合い、その触れ合いを通して、互いが高まっていったらこんな素晴らしいことはないと考えています。

学校教育の究極の目的は、「人格の完成」です。とするならば、性教育は、学校教育において重要な役割を果たすことになります。

このことを肝に銘じて、これからも、会員一人一人が持っている力を精いっぱい出し合い、より素晴らしい会になるよう努力していきたい思います。

今後ともご指導・ご支援をくださいますようお願いいたします。

発 刊 に よ せ て

前高性研会長 小田島 正門

このたび、高性研会誌が発刊されるとのこと、喜んでいきます。

高性研は、昭和50年に発足以来、25年近くになり、その間、意欲的に研究・指導実践を続けてきました。発足当時、活動や指導の記録は、「研究紀要」という名称で、年1～2回発刊されていました。

その後、研究・研修活動、研究発表会、講演会、実態調査活動、授業研究などで多忙となり、ある時期から発刊されなくなりました。

性教育の内容は、性自認、男女の人間関係家庭・社会とのかかわりなど、広い範囲にわたっています。どの内容も難しいものばかりですが、高性研では、これらの内容を研究・指導し、性教育の充実・発展のために、長い間、努力してきました。

性教育は、生理的な内容ばかりではなく、心理的内容、社会的な内容を含む広範囲なものであるため、指導者は、多くの科学的知識を持って、的確な指導をする必要があります。絶えず、研鑽に励み、生徒が「人間の性」をよく理解し、正しい行動や判断ができるように指導していった欲しいと思います。

会誌には、活動報告だけでなく、会員の個人研究がたくさん掲載されることを期待しています。

高研連への加入も実現し、予算的な面でも道が開けてきました。さらに会の活動を発展・充実させ、存在が認められて、補助金など受けられるようになることを願っています。

会誌の発刊を祝い、高性研のさらなる発展をお祈りいたします。

平成10年度活動報告

1. 総会 平成10年5月29日(土)

テレコムセンター 東京都職員研修所

(1) 平成9年度事業報告、会計報告と承認

平成10年度役員改選

平成10年度事業計画、予算承認

(2) 記念講演 「教育改革と性教育」

講師 田能村祐麒先生

(全国性教育研究団体連絡協議会理事長)

特別講座 「エイズキャンペーン講座」

講師 ラッキィ池田氏

2. 役員会・理事会

・ 4月21日(火) 役員会

都立向島商業高校

・ 3月16日(火) 役員会・理事会

都立本所高校

3. 研究活動

・ 5月29日(金) 講演会

東京都教職員研修所

「教育改革と性教育」 田能村祐麒氏

(田能村教育問題研究所所長)

・ 6月23日(火) 研究会 都立武蔵高校

「児童・生徒の性 1999年調査について」

・ 7月4日(土) 中・高合同研究会

原宿外苑中学校

「青少年の性の逸脱行動について」

・ 10月15日(木) 研究会

都立江戸川高校

「総合学習について」

・ 11月13日(金) 研究授業

都立府中東高校

「人の発生と生殖、動物の発生と生殖」

授業者 榎 茂喜教諭

・ 1月19日(火) 研究会

都立小石川高校

「実態調査の考察の仕方について」

・ 2月15日(月) 研究会

都立本所高校

「実態調査の考察」

4. 研究大会

・ 8月6日～9日 全国性教育研究大会

秋田市

テーマ「命と人間の尊重を考える」

発表 「自己決定能力を育てる性の指導」

発表者 井口一成 都立江戸川高校

・ 8月24日～26日 性教育宿泊研修会

山中湖

テーマ「生きる力を育む性教育」

・ 11月8日(日)

関東甲信越性教育研究大会

埼玉県上尾市

発表 「青少年の性の逸脱行動について」

発表者 矢野美智子 都立江東工業高校

・ 11月19日(木) 東京都性教育研究発表会

都立教育研究所

発表 「新教育課程と性教育の改善の方向」

発表者 黒瀬忠生 都立本所高校校長

『理科における性教育』（公開授業報告）

都立府中東高校 榎 茂 喜

1. 公開授業概要

日 時 平成10年11月13日（金）6 校時

授業者 東京都立府中東高等学校

教 諭 榎 茂 喜

助言者 東京都体育健康指導課

指導主事 牛島 三重子 先生

単元名 生物ⅠA・ヒトの一生

クラス 3年選択（男子18名、女子13名）

参加者 本校教職員を含め13名

2. 単元と指導内容

理科において性教育を授業で扱う場合では、人体の構造や生殖・発生のしくみ、ホルモンと性周期など、科学的な側面からの基礎的な知識の習得を目的とした講義形式の授業形態が中心となっている。また、ヒトを一つの生物例として扱うため、ヒトだけが持つ特異性について、扱うことは少ない。そのため、生徒自身が性に関しての問題意識をあまり持つことがないという傾向にある。

本校では必修科目として「生物ⅠB」は第1学年時に履修している。そこでは、細胞の構造と働き、生物体の構成、体細胞分裂と染色体、減数分裂と配偶子形成、生殖法、卵割と発生を学習している。しかし生殖・発生の単元では、ウニとカエルの発生が中心であり、胎盤など哺乳類の発生についてはあまり扱われていない。また、神経やホルモンについても学習しているが、ヒトの成長・老化・二次性徴については学習していない。

そこで、以下の様な観点において授業を展開することを考えた。

- ① 他の動物の生殖について調べることに
より、ヒトの生殖について、他の動物と
どの様な違いがあるのか、またどの様な

点が共通しているのかを学習する。

- ② ビデオ教材や資料を活用することにより、
情報活用や処理をおこなう。
- ③ 探究活動を重視し、生徒自身が問題を
解決して行くことのできる能力を養える
ように、助言・指導を行う。
- ④ 理科教育の学習の中でも、性に関する
学習を行い、生徒自身に性に対する意識
を高め、考え方を学ばせる。

2. 学習の流れ

生物ⅠAは、3年生の選択科目として開設している、週1回、5・6時限の2時間続きの講座である。公開授業はその後半の6時限で行った。5時限では、NHKで数年前に「いきもの地球紀行」で放映された『オスとメス・わが子を残す知恵比べ』を見せて、各自以下の作業を行った。

- ① ビデオの中で出てきた動物について、
その動物の相手の獲得や子孫を残すための
工夫や戦略を書き出す。
- ② 一番印象に残った動物とその理由を書く。
- ③ このビデオのように動物が様々な戦略
を持っている理由をオス・メス両面から
考える。
- ④ 動物の生殖についての疑問やさらに知
りたいと思ったことがらを書く。
- ⑤ ビデオの感想を書く。

公開授業は、ビデオを見終わった後の6時限に教室を講義室から実験室に移して行行った。授業は、5時限で作成した作業プリントをもとにして、動物の生殖、特に性交行動についてグループ討議を中心に進めた。そして、話し合いの結果は報告用紙に
どんどん記入していかせた。授業は以下の
項目についてグループで話し合わせ、でて

きた意見を用紙に各自どんどん記入させることによって進めた。

- ① 動物の性交行動が起こる原因や目的を討議し、記録する。
- ② ヒトの性交行動が起こる原因や目的を討議し、記録する。
- ③ 動物とヒトとの類似点と相違点およびその理由や原因を討議し、記録する。
- ④ グループの意見をまとめ、板書する。
- ⑤ 他のグループの意見を見て、再度グループ内で性交行動について討議し、まとめる。また、ヒトだけが持つ特徴・問題点などについても考える。
- ⑥ ヒトが性交行動（セックス）をすることについて自分の考えや感じたことを各自書く。
- ⑦ 授業の感想を各自書く。



4. 授業のまとめと考察

今回の公開授業に先立って性に関するアンケートを行った。その結果、『「性」という言葉を聞いて、あなたはにはどのようなイメージがわきますか』との質問に対しては、「男と女」という回答がが9名と一番多く、「セックスや性交」が5名と次に多かった。また、『「性交（セックス）」という言葉から連想される言葉を5つあげて下さい』という質問に対しては、「愛」という回答が最も多く、続いて、コンドーム、

表1. アンケート結果（質問：「性交（セックス）」という言葉から連想される言葉）

	男 子	女 子	男 女 総 計
1 位	愛(6)	愛(6)	愛(12)
2 位	気持ちいい(5)	子供(5)	コンドーム(7)
3 位	H(4) コンドーム(4)	男(4)	子供(6)
4 位		妊娠(3) 本能(3) コンドーム(3)	妊娠(5)
5 位	歌舞伎町(3)		エイズ(4) ホテル(4) H(4)・男女(4) 男(4)・女(4)

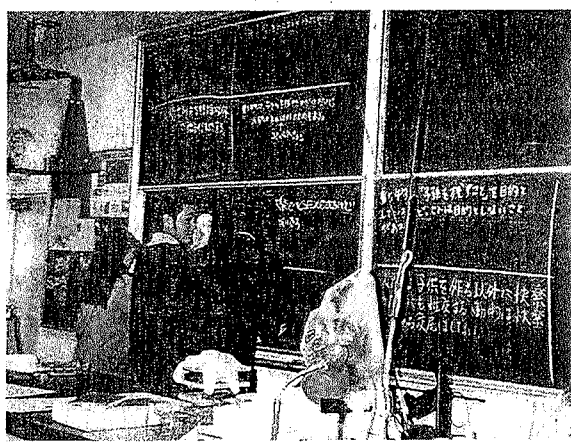
※（ ）内の数字は回答数

ム、子供、妊娠の順であった（表1）。生徒は今まで「性」についてしっかり考えたことがあまりないようであった。また、性教育というと、避妊やエイズや性周期などの知識を得る学習であると考えている生徒が多い。そこで、動物の生殖についてのビデオを教材として、そこから人間の生殖について考えるような授業を行ってみた。生徒は真剣にビデオを見て、一生懸命作業を行っていた。また、グループ討議では活発に意見を出し合って、教師の指導や助言をあまり必要としないほど自分たちで学習を進めていた。



ヒトが性交行動（セックス）をすることについて自分の考えや感じたことを書かせたところ、多くの感想を得ることができた。以下にいくつか紹介する。「ヒトは子どもを残すためにも性交するけど、そ

れ以外にも快楽を求めている。でも、動物には快楽はないのだろうか」「性交は遊びではない。お互いを理解し合って愛があってこそすることだと思う」「愛し合った者同士が、お互いの関係を深めるためや二人の子供を作ろうとするために行うことは、自然な事だと思うが、ただ自分だけの感情で、安易にしたり、相手を傷つけたりするのはよくないと思う」「ヒトは、子どものためだけじゃないから、もっと深い重要なことなんだとおもった」「愛があればいいとかいうけれども、相手の気持ちをよく考えて行動しようと思った」「これは、子供を残すという大切な行為だと思う。快楽を求めるのも愛情を深める行動の1つだと思う」「ヒトは動物と違って、子供を作るため以外にもやるため、その分問題点も多い」など、グループ討議では、動物と人間の表面的な違いだけでなく、精神的な事についても考えを出し合ったことがうかがえる。



また、この授業の感想には、「しんけんいろいろな話し合ってみるとわからないことだらけだった。私も人間だけど人間は不思議だとすごく思った」「みんなで話し合えて楽しかった」「今まで特に考えなかったことを考えた」「いろいろ考えさせられた。性交行動とは謎が付きにくい課題だ。神秘だ。すばらしい!」「改めて、いろいろ

考えて、動物と人間のちがいがよくわかった。動物にも人間にも大切な事だとおもった。」「いろいろ話し合えて楽しかった。あらためて考えさせられたような気がする」など、今まで考えたことがないことを考え、学習が楽しかったと多くの生徒が書いていた。グループ討議という授業形態は、生徒の意欲や意識を高め、より高い学習効果を生むことがわかった。

授業終了後の研究協議において、今後の授業の展開が重要であると助言を受けた。理科という教科で性教育を行うには限界があると考え。しかし、今まで講義中心で行われていたような生殖・発生あるいは免疫、エイズ、ホルモンなどについての学習も大切ではあるが、それだけでなくもっと心の問題も含めた多面的な扱いが必要になってくると考える。新しい指導要領では、「生きる力」を身に付けることが1つの大きな柱となっている。性教育は人間の生き方や個人のあり方を学ばせる学習活動である。そのため、この「生きる力」を育むには良い教育課題であると考え。そのためにも、色々な教科や、今後展開されるであろう総合的な学習の時間において性教育を取り上げる必要があると考える。今後は、生徒の自主的な学習活動を身に付けるために、さらに教材や指導法の工夫をしていくつもりである。



生物ⅠA 学習指導案

日 時 平成10年11月13日(金) 6校時
指導学級 東京都立府中東高等学校 第3学年
選択科目生物ⅠA 男子22名 女子14名
授業者 東京都立府中東高等学校教諭 榎 茂喜

1. 単元名『ヒトの一生』

2. 単元設定の位置づけ

(1) 教材観

- ① 単元の中項目である『ヒトの一生』では、ヒトの一生がどのように変化していくのかを、生殖・発生・成長・老化などを中心に学習する。また、『ヒトの遺伝』では、ヒトの持つ特徴がどのようにして親から子へと受け継がれていくのかを学習する。発生・遺伝という生物にとって重要な問題をヒトを題材として展開していく。しかし、分化や老化など、まだ十分に解明されていない分野を多く含んでいる。そのため、深入りをしないよう全体の流れを把握できるようにする。
- ② 理科における性教育では、人体の構造や生殖・発生のしくみ、ホルモンと性周期などについて、科学的な側面からの基礎的な知識の習得を目的とした講義形式の授業形態が中心となっている。また、ヒトを一つの生物例として扱うために、ヒトだけが持つ特異性についてはあまり扱わない。そのため、生徒自身が性に関しての問題意識をあまり持つことがないという傾向にある。
- ③ 中学校では、「理科」において、細胞の構造、体細胞分裂、有性生殖・無性生殖を学習している。特に生殖ではカエルについての卵と精子の形成・構造・受精と発生を学習している。また、「保健」においては、二次性徴や身体や精神の発達、心身の調和について学習している。さらに、健康と環境や生活と疾病についても学習している。また、「技術・家庭」では、幼児の心身の発達について学習している。
- ④ 「生物ⅠB」は本校では、必修科目として第1学年時に履修している。そこでは、細胞の構造と働き、生物体の構成、体細胞分裂と染色体、減数分裂と配偶子形成、生殖法、卵割と発生を学習している。ただし、ここではウニとカエルの発生が中心であり、胎盤など哺乳類の発生についてはあまり扱われていない。また、神経やホルモンについても学習しているが、ヒトの成長・老化・二次性徴については学習していない。

(2) 指導観

- ① 他の動物の生殖について調べることにより、ヒトの生殖について、他の動物とどのような違いがあるのか、またどのような点が共通しているのかを学習する。
- ② ビデオ教材や資料を活用することにより、情報活用や処理をおこなう。
- ③ 探究活動(グループ討論)中に各班を巡回し、討論が円滑におこなえるよう、助言・指導をおこなう。
- ④ 理科教育の学習の中にも、性に関する学習を行い、生徒自身に性に対する意識を高め、考え方を学ばせる。

3. 単元目標

(1) 総括目標

- ① ヒトの体の成り立ちや染色体の意味を理解する。
- ② ヒトの配偶子形成と受精から出産までの流れを把握する。また、発生における胎盤の役割を理解する。
- ③ ヒトの一生の間の変化、特に生命の連続性の意味を十分に理解する。
- ④ ヒトの生殖を学習することにより、ヒトの性に関する事項について自ら考える能力を養う。

(2) 具体的目標

① 自然現象への関心・意欲・態度

- ア. 動物の生殖・発生・遺伝について意欲的に調べようとする。
- イ. ヒトの生殖・発生・遺伝について意欲的に調べようとする。
- ウ. 性に関する学習において、自分自身の意見をもつようにする。

② 科学的思考

- ア. 生命現象についての一様性と特異性を理解する。
- イ. ヒトの生殖における特異性を、今までの学習をもとにして考える。
- ウ. 体のなかには一生をおくるためのさまざまなしくみがあることに気付く。

③ 探究活動の技能・表現

- ア. 資料としての教材からの、情報収集および処理のしかたを習得する。
- イ. グループでの討論の仕方を習得する。

④ 自然現象についての知識・理解

- ア. 動物の生殖や発生についてのしくみがわかる。
- イ. ヒトの生殖や発生ではヒト特有な現象がみられることがわかる。
- ウ. ヒトの成長・老化などにおいて、ホルモンや神経の関与が重要であることがわかる。
- エ. ヒトの遺伝についてのしくみがわかる。

⑤ 性に関する学習

- ア. ヒトの生殖についての基礎的な知識を理解する。
- イ. ヒトの生殖、特に性交行動についての特異性を理解する。
- ウ. ヒトの性交行動における特徴や問題点を考える。

4. 指導計画

(1) 単元全体の指導計画（全18時間）

『親から子へ』

① ヒトの一生

- A. 細胞の増殖……………（1時間）
 探究活動 細胞分裂と初期発生……………（2時間）
- B. ヒトの発生……………（4時間）
 探究活動 ヒトと動物の生殖と発生……………（2時間） 本時
- C. 成長・成熟と老化……………（2時間）

② ヒトの遺伝

- A. ヒトの形質の遺伝……………（½時間）
 探究活動 ヒトの形質を調べる……………（½時間）
- B. 遺伝のしくみ……………（1時間）
 探究活動 遺伝のしくみのモデル実験……………（1時間）
- C. 血液型の遺伝……………（½時間）
- D. 性と遺伝……………（½時間）
- E. 遺伝子と染色体……………（1時間）
 探究活動 だ腺染色体の観察……………（1時間）
- F. 変異とその要因……………（1時間）

(2) この単元の指導計画

『ヒトの一生』（全11時間）

	配 時 間	主 な 学 習 活 動	生 徒 の 活 動	指 導 上 の 留 意 点 お よ び 備 考
A細胞の増殖	1	①細胞 ②細胞分裂 ③染色体	生物は細胞からなることと 細胞の増殖のしくみについ て理解する。	生物の一様性に重点をおく。
	2	探究活動	細胞分裂と初期発生	
Bヒトの発生	4	①生殖器官 ②卵・精子形成 ③受精 ④生殖・発生 ⑤出産	ヒトの生殖に関するしくみ を理解する。	有性生殖の意味について理解 させる。 発生の過程はおおまかに流れ を把握させる。胎生の持つ意 味について重点を置く。
	2	探究活動	ヒトと動物の生殖と発生	本時
C成長・成熟 と老化	2	①成長 ②ホルモン ③性周期 ④老化と寿命	ヒトのライフサイクルにと もなう変化を理解する。	興味本位にならないように注 意しながら、性（生殖・性行 動）のもつ意味を十分に理解 させる。

5. 本時の指導計画

(1) 目標

- ① ヒトと動物との生殖行動の共通性を理解し、生物の生殖行動の意味を考える。
- ② ヒトと動物との生殖行動の違いを理解し、ヒトの生殖行動の持つ意味を考える。
- ③ グループ討論を通して、性に関する事項について、自分自身で考える能力を育成する。

(2) 展開

	主な学習活動	生徒の活動	指導上の留意点
導入	本日の学習活動を理解する	ヒトと動物の生殖に関する違いを考える。	主体的な学習活動になるように助言・指導する。
展開	ビデオ教材を見る	ビデオ教材を見て、必要な事項を記録する。	メモをとらせることにより、要点の把握をさせる。
	資料整理	グループごとに分かれて作業をおこなう。	資料・作業プリントを配付する。
	グループ討論	各自、気付いた点をプリントに記入しする。 グループ内で討論を行い。ヒトと動物の発生の違いをまとめる。	友人と意見を交換しながら記入させる。 机間指導により、討論が進むように助言をおこなう。
まとめ	グループごとに結果の発表	まとめを発表する。	黒板に板書する。
	さらにグループ討論を行う	他の班の意見を参考にしてさらにグループ内で討論を行い、ヒトの性行動の特異性を考える。 ヒトの性行動の目的について考える。	他のグループの意見と自分の意見を比べてさらに討論を深める。 多くの意見があることを理解させる。 正しい答えを求めさせるのではなく、自分で考え、自分の意見を持つことに重点をおく。

(3) 評価

- ① 動物の生殖のしくみについて理解できたか。
- ② ヒトと動物の生殖の違いについて理解できたか。
- ③ 資料から必要な情報を選択し、まとめることができたか。

報告用紙 (No. 1)

「生きものの数だけ愛の表現。愛の営みがある」と言われています。このビデオ『オスとメス・わが子を残す知恵比べ』を見て以下の作業をして下さい。

1. どのような動物が出てきましたか。また、相手を獲得するためや自分の子供を残すためにどのような工夫や戦略をしていましたか。

勤 物 名	工 夫 や 戦 略

2. 一番印象に残った動物は何ですか。また、それはなぜですか。

3. このビデオのように様々な方法を用いて相手を獲得したり、自分の子供を残そうとするのはどうしてだと思いますか。オスとメスそれぞれからの理由を考えましょう。

☆オス側からの理由

☆メス側からの理由

4. 動物の生殖について疑問に思ったり、さらに知りたいと思ったことがらを書いて下さい。

5. ビデオの感想を書いて下さい。

年 組 番氏名

報告用紙 (Na 2)

ビデオを見終わったわけですが、これから動物の生殖、特に性交行動について考えたいと思います。そこで、以下のことがらについてグループ内で話し合いをしましょう。（話し合った結果はこの報告用紙にどんどん記入して行って下さい。）

1. 動物の性交行動がおこる原因(どういうときに性交行動をするのか)や目的は
 为什么呢。(グループで話し合っ出てきた意見を各自どんな書いて下
 さい。)

2. ヒトの性交行動がおこる原因(どういうときに性交行動をするのか)や目的は
 为什么呢。(グループで話し合っ出てきた意見を各自どん書いて下
 さい。)

3. 動物とヒトとでは違いがあるだろうか。類似点と相違点を考えましょう。また相違点があるならばそれはどうしてであるのか理由や原因を考えましょう。(グループで話し合っ出てきた意見を各自どんどん書いて下さい。)

☆類似点

☆相違点

☆相違点の原因や理由

4. 他のグループの意見を聞いてみて、ヒトの性交行動についてどのようなことを考えましたか。まとめてみましょう。また、ヒトだけが持つ特徴や問題点などについても考えてみましょう。(グループで話し合って出てきた意見を各自どんどん書いて下さい。)

5. ヒトが性交行動（セックス）をするということについて自分の考えや感じたことを書いて下さい。（自分自身の意見を書いて下さい。）

6. 本日の授業の感想を書いて下さい。(自分自身の意見を書いて下さい。)

年	組	番氏名
1941	1	1
1942	2	2
1943	3	3
1944	4	4
1945	5	5
1946	6	6
1947	7	7
1948	8	8
1949	9	9
1950	10	10
1951	11	11
1952	12	12
1953	13	13
1954	14	14
1955	15	15
1956	16	16
1957	17	17
1958	18	18
1959	19	19
1960	20	20
1961	21	21
1962	22	22
1963	23	23
1964	24	24
1965	25	25
1966	26	26
1967	27	27
1968	28	28
1969	29	29
1970	30	30
1971	31	31
1972	32	32
1973	33	33
1974	34	34
1975	35	35
1976	36	36
1977	37	37
1978	38	38
1979	39	39
1980	40	40
1981	41	41
1982	42	42
1983	43	43
1984	44	44
1985	45	45
1986	46	46
1987	47	47
1988	48	48
1989	49	49
1990	50	50
1991	51	51
1992	52	52
1993	53	53
1994	54	54
1995	55	55
1996	56	56
1997	57	57
1998	58	58
1999	59	59
2000	60	60
2001	61	61
2002	62	62
2003	63	63
2004	64	64
2005	65	65
2006	66	66
2007	67	67
2008	68	68
2009	69	69
2010	70	70
2011	71	71
2012	72	72
2013	73	73
2014	74	74
2015	75	75
2016	76	76
2017	77	77
2018	78	78
2019	79	79
2020	80	80
2021	81	81
2022	82	82
2023	83	83
2024	84	84
2025	85	85
2026	86	86
2027	87	87
2028	88	88
2029	89	89
2030	90	90
2031	91	91
2032	92	92
2033	93	93
2034	94	94
2035	95	95
2036	96	96
2037	97	97
2038	98	98
2039	99	99
2040	100	100

学 習 指 導 案

1	授業担当者	山 元 和 三 
2	科 目 名	保 健
3	対 象	第1学年6組（男子・8名・女子25名）
4	実 施 日 時	平成11年1月21日（木）
5	単 元 名	「集団の健康」 ～エイズ（AIDS）～
6	主 題	「豊かな人間性を育むエイズ教育（性教育）」
7	主題設定の理由	エイズは現在でも着実に感染者が増え、世界的にも問題となって様々な啓発活動も行われている。そこで、エイズに対する正しい理解と予防について学習し、問題となっている感染者や患者に対する偏見・差別を払拭し、共存できる態度を身につけ、また、個人としてできることは何かを考えさせるために本題を設定した。
8	単元のねらい	エイズを正しく理解し、これ以上拡大しないように予防し、感染した人や家族に対する偏見・差別をなくして共存していけるよう、やさしさや思いやりを大切にし、共に生きて行ける態度を養う。

9. 指導計画（配当時間：3時間）

第 1 時限 [本 時]	<エイズの現状と問題点> ①エイズについての導入 ・性感染症としてのエイズ ・エイズとは ・H I Vとは ②エイズの現在の状況 ・世界、日本の現状 ③エイズを取り巻く問題点 ・社会的問題点、健康面からの問題点 ④偏見・差別とは
第 2 時限	<エイズの基礎知識の理解> ①免疫について ②H I Vについて ③症状について ④感染源について ⑤予防・治療法について
第 3 時限	<エイズの予防・偏見、差別の払拭・共存・ケア> ①個人としての予防 ②社会としての予防 ③エイズ感染者・患者に対する偏見、差別を払拭するには ④共存するには ⑤ケアについて

10. 授業展開〔第1時限〕〔本 時〕

(1) 本時のねらい

- ア. エイズは性感染症の一つであることを理解する。
- イ. 感染者は増加しているということを理解する。
- ウ. エイズの問題点を確認する。
- エ. 偏見・差別について理解する。

(2) 展開

	学習内容	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	本時の目標を知る	・エイズは性感染症の一つであることを理解する。 ・AIDSとは何の略語か考える。 ・HIVとは何の略語か考える。	・生徒に質問し、答えがでなければ説明する。
展 開	1. エイズの現在の状況を知る。 2. エイズを取り巻く社会的問題点健康面からの問題点を知る。 3. 偏見・差別の意味を知る。	・エイズの現在の世界、日本での状況について理解する。 ・なぜ、エイズが社会問題となっているかを考える。 ・社会的問題点について理解する。 ・健康面からの問題点について理解する。 ・偏見の意味を理解する。 ・差別の意味を理解する。	・資料をもとにし、説明する。 ・生徒に質問し、答えがでなければ説明する。 ・生徒に質問し、答えがでなければ説明する。
ま と め	次回の学習内容を知る。	・今日の授業で理解できた内容と理解できなかった内容についてまとめる。	・レポート用紙にまとめて明日に提出させる。

(3) 評価

- ア. エイズの現在の状況について理解できたか。
- イ. エイズを取り巻く問題点を理解できたか。
- ウ. 偏見・差別の意味を理解できたか。

11. 授業展開〔第2時限〕

(1) 本時のねらい

ア. エイズの基礎知識を理解することが、予防につながることを理解する。

イ. エイズの基礎知識を理解することが、偏見・差別をなくすことになることを理解する

(2) 展開

	学習内容	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	本時の目標を知る	・エイズの基礎知識を理解して、エイズに対する予防や、偏見・差別をなくす必要性を理解する。	・生徒に質問し、答えがでなければ説明する。
展 開	1. 免疫について知る。 2. ウィルスについて知る。 3. 症状について知る。 4. 感染源について知る 5. 予防と治療について知る。	・免疫の仕組みについて理解する。 ・HIVについて理解する。 ・HIVに感染してからどのようにして発病するかについて理解し、症状についても理解する。 ・感染ルートを理解し、ハイリスクな行動についても理解する。 ・どのように予防したら良いかを理解する。 ・完全な治療方法はまだ見つかっていないが、エイズに対する治療は現在どこまで進んでいるかを理解する。	・資料をもとにし、説明する。 ・資料をもとにし、説明する。 ・資料をもとにし、説明する。 ・資料をもとにし、説明する。 ・生徒に質問し、答えがでなければ資料をもとにし説明する。
ま と め	次回の学習内容を知る。	・エイズの基礎知識をきちんと理解することが大切であることを理解する。 ・次回は設問に対して自分の意思を述べることを理解する。	・設問のプリントを配布する。

(3) 評価

ア. エイズの基礎知識について理解できたか。

イ. エイズの基礎知識を理解することによって、予防や偏見・差別をなくせることについて理解できたか。

12. 授業展開〔第3時限〕

(1) 本時のねらい

ア. エイズに関する設問を出し、様々な問題点を考え、個人として、社会として何ができるかを討論して、さらに理解を深める。

イ. 差別・偏見をなくし、共に生きることについて考える。

(2) 展開

	学習内容	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	本時の目標を知る	・エイズを取り巻く問題点について、設問に対して討論をし、理解を深める。	・互いの意見を尊重しながら、自分の意見を発表させる
展 開	エイズを取り巻く問題点について、設問に対する討論	設問 ①個人としての予防 ②社会としての予防 ③エイズ感染者・患者に対する偏見、差別を払拭するには ④共存するには ⑤ケアについて	・偏見・差別について生徒の発言内容に十分に注意を払う。 ・設問一つに対して6分間配分する。 ・生徒から意見がでない時は資料を提供する。
ま と め	・各設問に対する討論のまとめ	・各設問に対して、各人がレポートにしてまとめる。	・それぞれの意見に対して感想を述べまとめる。 ・レポートの提出期日を指示する。

(3) 評価

ア. 個人によって様々な考え方があるが、今回の討論を通して理解や考え方を深めることができたか。

イ. 自分の生き方についてあらたに考えることができたか。

ウ. 偏見・差別をなくし、共に生きて行くことについて考えることができたか。

○世界のエイズ患者の状況（1998年6月20日現在、WHO報告）

地 域	患 者 発 生 状 況	患 者 数	人 口
アフリカ州 (54カ国)	686,256人 タンザニア ケニア ジンバブエ	97,621人 78,765人 70,669人	23,126千人 21,433千人 10,412千人
アメリカ州 (45カ国)	889,465人 アメリカ ブラジル メキシコ	641,068人 120,399人 35,119人	248,709千人 146,825千人 81,249千人
アジア州 (42カ国)	101,429人 タイ インド 日本	83,357人 6,252人 1,799人	54,532千人 846,302千人 126,220千人
ヨーロッパ州 (40カ国)	207,890人 スペイン フランス イタリア	50,155人 47,953人 41,627人	39,433千人 56,634千人 59,103千人
オセアニア州 (16カ国)	8,744人 オーストラリア	7,571人	16,850千人
計（197カ国）	1,893,784人		

（ ）内は、患者報告のあった国数である。 日本の患者数は1998年6月末現在

○1997年1年間の世界の数

- ・HIVと共に生きている人 3,000万人
- ・1997年1年間の感染者 580万人
- ・1997年1年間で死亡した人 230万人

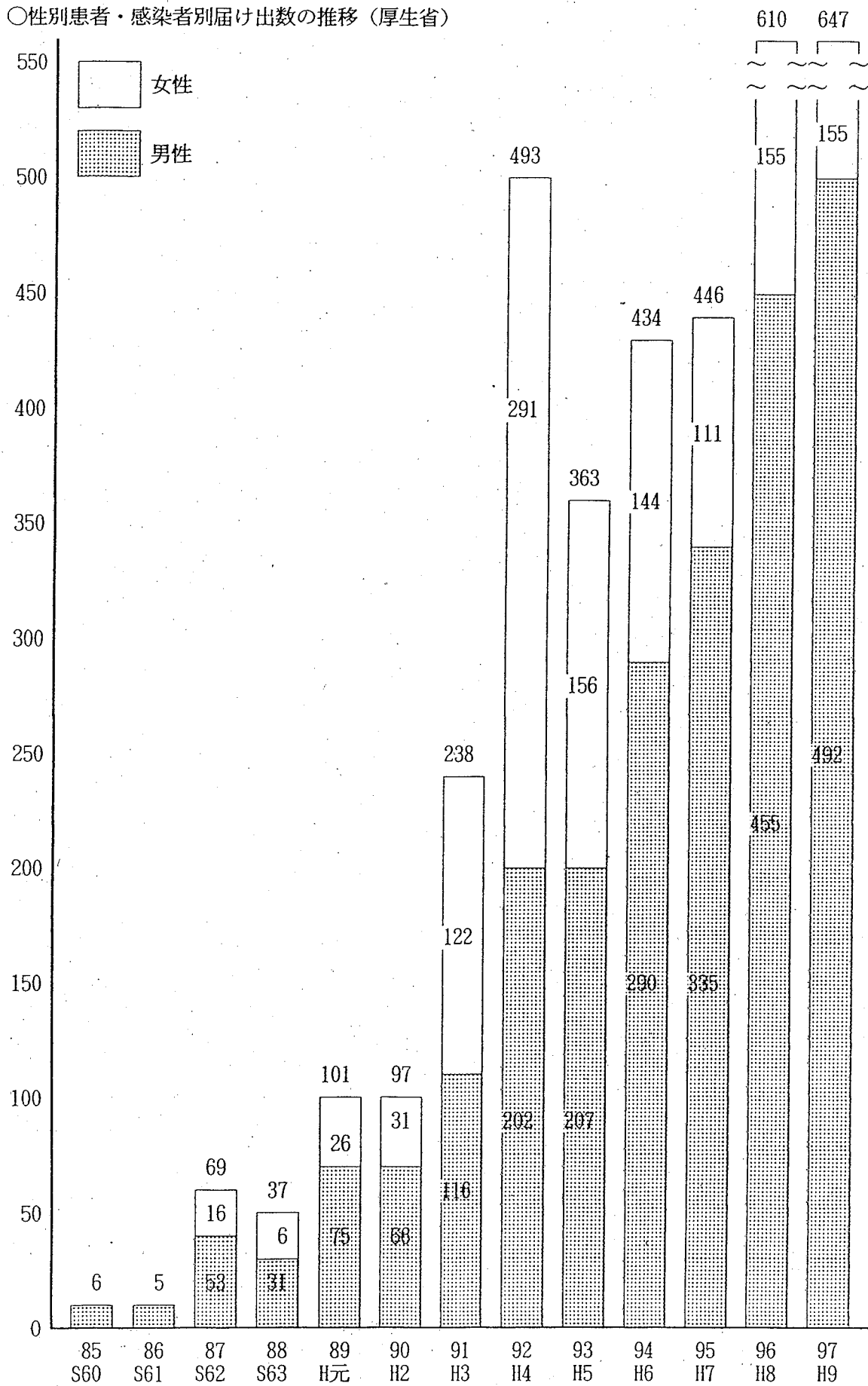
○1998年1年間の世界の数

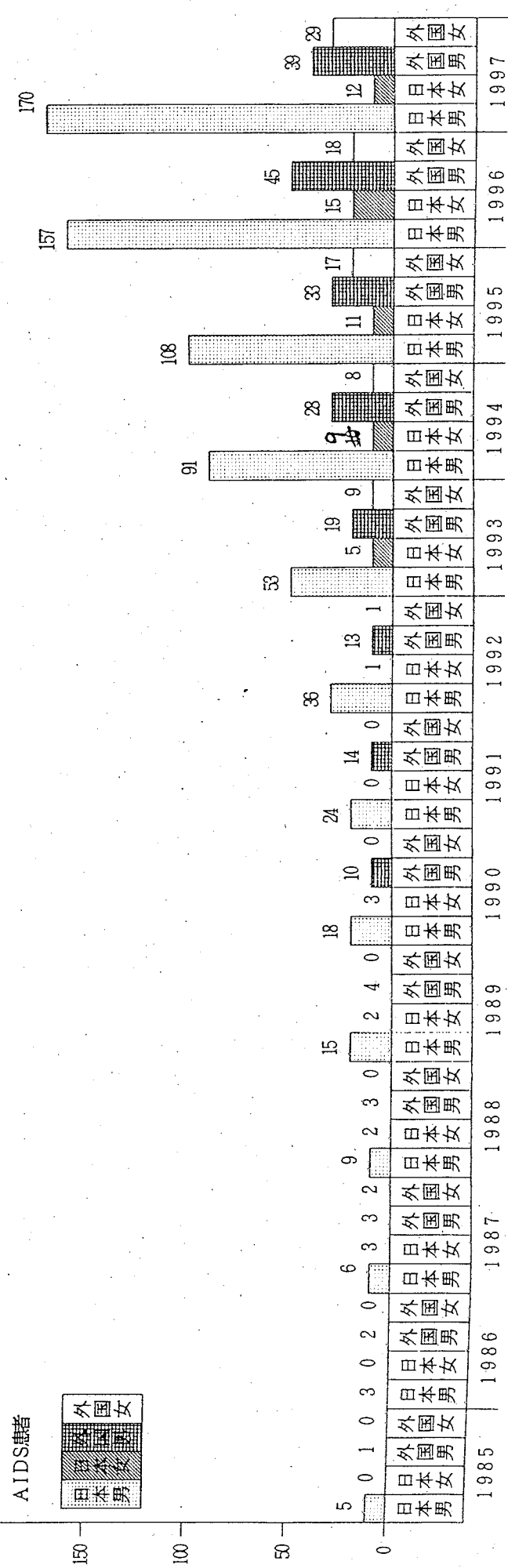
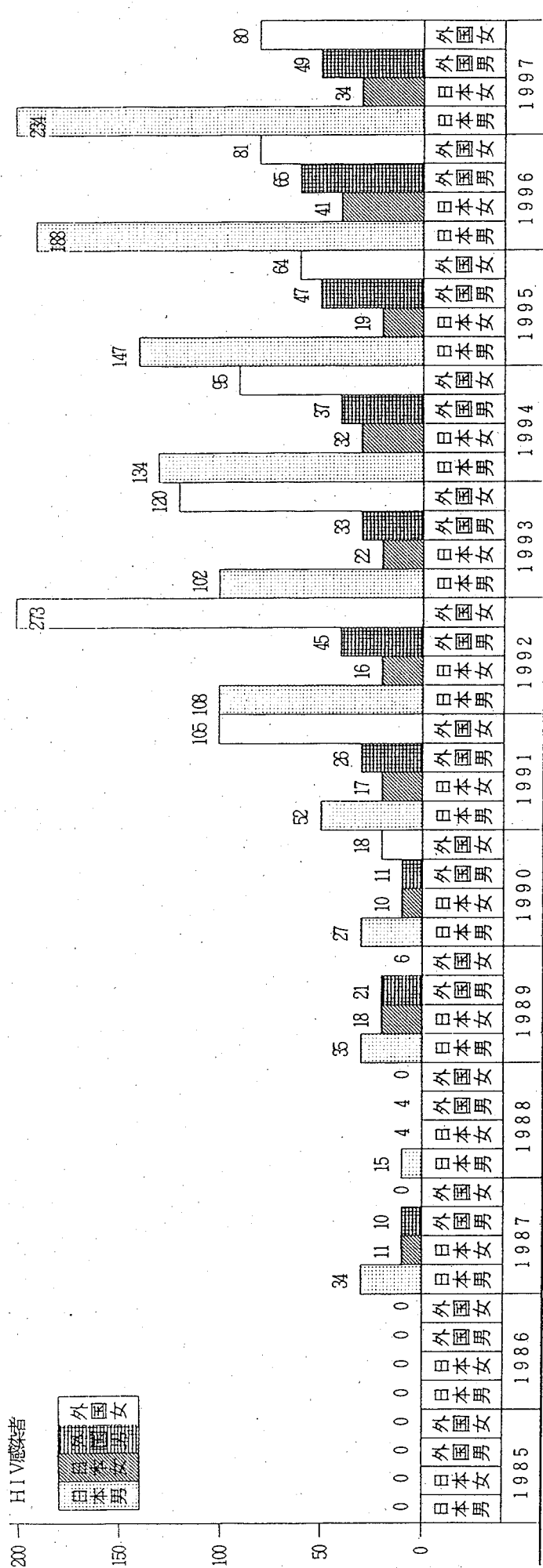
- ・HIVと共に生きている人 3,340万人
- ・1998年1年間の感染者 580万人
- ・1998年1年間で死亡した人 230万人

○1998年HIVと共に生きている人

- ・アフリカ 2,520万人
- ・アジアパシフィック 20万人
- ・東南アジア 120万人

○性別患者・感染者別届け出数の推移（厚生省）





・凝固因子製剤による感染を除く患者・感染者等の状況
 ・性別・年齢区分別・感染地域別患者・感染者数（法施行後）

（厚生省）
 （単位：件）

		男 性			女 性			男 女 合 計		
		国 内	海 外	不 明	国 内	海 外	不 明	国 内	海 外	不 明
10歳未満	感染者	9	1	0	6	4	1	15	5	1
	患 者	7	0	0	1	2	0	8	2	0
10～19	感染者	7	0	1	15	43	34	22	43	35
	患 者	0	0	0	1	0	1	1	0	1
20～29	感染者	303	101	82	142	263	362	445	364	444
	患 者	54	55	39	13	15	32	67	70	71
30～39	感染者	254	165	105	55	42	83	309	207	188
	患 者	115	115	83	13	24	19	128	139	102
40～49	感染者	188	87	56	15	9	8	203	96	64
	患 者	131	80	82	3	10	5	134	90	87
50歳以上	感染者	121	50	36	26	0	1	147	50	37
	患 者	109	65	65	15	1	5	124	66	70
不 明	感染者	0	1	2	0	4	1	0	5	3
	患 者	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	感染者	882	405	282	259	365	490	1141	770	772
	患 者	416	315	269	46	52	62	462	367	331

○献血件数及びHIV抗体陽性件数 （ ）内女性

	献血件数（実施数）	陽性者数
1989年（元年）	7, 876, 682	13（1）
1990年（H2）	7, 743, 475	26（6）
1991年（H3）	8, 071, 937	29（4）
1992年（H4）	7, 710, 693	34（7）
1993年（H5）	7, 205, 514	35（5）
1994年（H6）	6, 610, 484	36（5）
1995年（H7）	6, 298, 706	46（9）
1996年（H8）	6, 039, 394	46（5）
1997年（H9）	5, 998, 760	54（5）

平成10年9月29日

※抗体検査陽性の献血血液は、焼却されており、使用されていない。

エイズアンケート集計結果 実施日 平成8年12月

組・性 サンプル数	1年男計	1年女計	1年合計	1年分布%	2年男計	2年女計	2年合計	2年分布%	3年男計	3年女計	3年合計	3年分布%	全学年男計	全学年女計	全学年合計	分布%
1 エイズという感染症はどんな病気か知っていますか。	50	172	222		61	157	218		49	78	127		160	407	567	
ア 知っている	45	156	201	90.5	53	142	195	89.4	43	69	112	88.2	141	367	508	89.6
イ 知らない	5	16	21	9.5	8	15	23	10.6	5	9	14	11.0	18	40	58	10.2
2 現在あなたはエイズにどの程度関心がありますか。																
ア おおおいに関心がある	7	21	28	12.6	6	17	23	10.6	11	9	20	15.7	24	47	71	12.5
イ 少し関心がある	35	119	154	69.4	44	101	145	66.5	20	53	73	57.5	99	273	372	65.6
ウ 関心はない	8	32	40	18.0	11	39	50	22.9	17	15	32	25.2	36	86	122	21.5
3 今までに学校でエイズに関する教育を受けたことがありますか。(複数可)																
ア ない	2	11	13	5.9	6	25	31	14.2	8	16	24	18.9	16	52	68	12.0
イ 小学校低学年	0	1	1	0.5	1	2	3	1.4	2	0	2	1.6	3	3	6	1.1
ウ 小学校高学年	6	10	16	7.2	7	11	18	8.3	8	2	10	7.9	21	23	44	7.8
エ 中学1年	9	33	42	18.9	9	23	32	14.7	5	7	12	9.4	23	63	86	15.2
オ 中学2年	23	45	68	30.6	20	45	65	29.8	14	14	28	22.0	57	104	161	28.4
カ 中学3年	33	91	124	55.9	34	92	126	57.8	24	48	72	56.7	91	231	322	56.8
キ 高校1年	34	122	156	70.3	29	51	80	36.7	9	14	23	18.1	72	187	259	45.7
ク 高校2年	0	0	0	0.0	32	58	90	41.3	7	15	22	17.3	39	73	112	19.8
ケ 高校3年	0	0	0	0.0	1	0	1	0.5	6	2	8	6.3	7	4	11	1.6
コ 講演会・研究会	1	2	3	1.4	2	1	3	1.4	1	0	1	0.8	4	3	7	1.2
4 あなたはエイズに関する知識をどこから得ていますか。(複数可)																
ア 友達	11	14	25	11.3	11	10	21	9.6	14	6	20	15.7	36	30	66	11.6
イ 漫画本・雑誌	12	29	41	18.5	17	45	62	28.1	16	24	40	31.5	45	98	143	25.2
ウ テレビ・ラジオ	32	91	123	55.4	42	101	143	65.6	33	62	95	74.8	107	254	361	63.7
エ 新聞	15	52	67	30.2	20	52	72	33.0	7	12	19	15.0	42	116	158	27.9
オ 親・兄弟姉妹	2	14	16	7.2	5	14	19	8.7	3	1	4	3.1	10	6	16	2.9
カ 学校の先生	39	143	182	82.0	34	97	131	60.1	11	27	38	29.9	84	267	351	61.9
キ その他	3	10	13	5.9	5	17	22	10.1	3	4	7	5.5	11	31	42	7.4
5 あなたはエイズに関する知識をどこから得たらいと思っていますか。(複数可)																
ア 友達	7	6	13	5.9	7	6	13	6.0	5	4	9	7.1	19	16	35	6.2
イ 漫画本・雑誌	9	28	37	16.7	14	31	45	20.6	6	14	20	15.7	29	73	102	18.0
ウ テレビ・ラジオ	27	78	105	47.3	31	91	129	59.2	26	51	77	60.6	91	220	311	54.9
エ 新聞	18	53	71	32.0	19	49	68	31.2	11	15	26	20.5	48	117	165	29.1
オ 親・兄弟姉妹	8	15	23	10.4	6	17	23	10.6	4	2	6	4.7	18	34	52	9.2
カ 学校の先生	34	100	134	60.4	34	89	123	56.4	11	27	38	29.9	79	216	295	52.0
キ その他	10	11	21	9.5	9	18	27	12.4	3	6	9	7.1	22	35	57	10.1
6 あなたはHIV感染者を支えるボランティア活動をしたことがありますか。																
ア ある	0	0	0	0.0	6	0	6	2.8	1	2	3	2.4	7	4	11	1.6
イ ない	50	170	220	99.1	59	157	216	99.1	46	76	122	96.1	155	403	558	98.4
7 あなたはHIV感染者を支えるボランティア活動があれば参加したいと思いませんか。																
ア 参加したい	4	16	20	9.0	4	16	20	9.2	5	8	13	10.2	13	40	53	9.3
イ 参加したくない	13	25	38	17.1	13	22	35	16.1	13	4	17	13.4	39	51	90	15.9
ウ わからない	33	129	162	73.0	44	119	163	74.8	30	66	96	75.6	107	314	421	74.3
8 あなたの近くにHIV感染者がいた場合どのように接しますか。																
ア 普通に接する	31	123	154	69.4	41	92	133	61.0	22	41	63	49.6	94	256	350	61.7
イ 避ける	6	5	11	5.0	4	5	9	4.1	4	1	5	3.9	14	11	25	4.4
ウ わからない	15	44	59	26.6	16	60	76	34.9	22	39	61	48.0	53	143	196	34.6
9 エイズの原因はウイルスによる感染症であると思いませんか。																
ア 思う	27	87	114	51.4	31	58	89	40.8	21	36	57	44.9	79	181	260	45.9
イ 思わない	7	25	32	14.4	9	23	32	14.7	10	9	19	15.0	26	57	83	14.6
ウ わからない	16	57	73	32.9	21	73	94	43.1	17	35	52	40.9	54	165	219	38.6

中・高合同研修会

都立江東工業高等学校 矢野 美智子

平成2年度から、恒例になった中・高合同研修会が、7月4日（土）に渋谷区立原宿外苑中学校にて開催された。

「性の社会問題への対応をどう進めていくか」というテーマで、意見が交換された。

性に関する高校生の問題行動は、援助交際・ブルセラ・テレホンクラブ・デートクラブ・売春など大きな社会問題となっている。これらは、マスコミにも「性非行」「不純異性交遊」「性の逸脱行動」という言葉で取り上げられている。

しかし、どのような行動が問題なのかは、その人の性に関する意識や価値観によって大きく違ってくるはずである。

「援助交際」を取り上げ、子ども自身の問題、保護者の問題、学校（教師）の問題、社会の問題について、それぞれ話し合いをした。

<子ども自身の問題>

- ・自分の価値観をみせつけるため
- ・みんながやっているから、わたしも・・・
- ・友人とのつながりが、物品での交流でしかないため、お金がかかる（金がほしい）
- ・友達がいらない
- ・淋しい
- ・受験戦争の狭間で生きている

<保護者の問題>

- ・家庭の淋しさ
- ・家庭に子どもの居場所がない
- ・親が遊んでいる
- ・家庭の教育力の低下
- ・家庭に家長がいらない
- ・いい親を演じている
- ・親が親をしていない
- ・性的な考えとして捉えていない
- ・性教育を受けないで通り過ぎた世代

<学校（教師）の問題>

- ・現状を理解していない
- ・教師自身が勉強しなければならない
- ・節度・受容・対応が必要
- ・セクシャリティを理解できる教師に
- ・教科の中で性教育を指導する
- ・家庭教育での問題で学校は関係ない
- ・性教育をどのようにすすめたらよいかかわらない

<社会の問題>

- ・買う男がいるからいけない
- ・マスメディアの影響
- ・大人社会の影響（不倫・愛人問題）
- ・男社会の在り方（売春認容の風潮）
- ・情報の多様化
- ・セクシャリティをどう捕らえているか

一人一人の話を聞いていくと、教師のなかでも、それぞれ意見が違い、各自が生まれ育った環境が大きく影響していると感じた。

大先輩の「女学生は清くなくてはいけない」というお言葉に、若い男性教諭は、「されどやや乱れていると魅力的」という返し言葉に私、女性としては、『男性は身勝手』と心の中でつぶやいた。

2時間余りの研修会を終え、そのまま「さようなら」も淋しく、二次会の親睦会場へ、みんなで出かけた。ここでも、大いに話に花が咲き、たっぷり日も落ち、中・高合同研修会は終わりとなった。

第19回性教育宿泊研修会報告

基本テーマ 「生きる力を育む性教育」－改善・充実に向けて－

期日 平成10年8月24日(月)～26日 水) 場所 山中湖畔荘 「清溪」

講師 松本 清一 宮原 忍 武田 敏 石川 哲也 田能村 祐麒 各先生

講演Ⅰ「新しい教育課程と性教育」

田能村祐麒先生

中央教育審議会の答申や教育課程審議会の中間まとめに「性教育」に関する記述はないが、学校における性教育は、教育課程の基準の改善の基本的方向やねらいに基づいて、検討し、改善を図っていく必要がある。

「生きる力」を育むために、性教育は、どうかかわるのか、どうあればよいのかということが課題となる。その課題を解決するためには、まず「性教育」という言葉の概念を明確にするとともに、その目標を確かなものにしなければならない。

「性教育」という言葉は、現在では、国際的にもセクシャリテイの教育と称している。これは、性科学の発達によるものであるが、性科学とは、性に関する内容を扱う全ての学問分野を含む総合的な科学のことであって、特定の方法論や体系をもった独立した科学ではない。人文科学、自然科学、社会科学のほとんどが関係しており、単に、医学や生理学に関する内容のみではない。

また、「教育」という機能は、人間が社会生活を営む場のすべて、例えば、家庭、学校、地域社会、職場など、それぞれに存在しており、人間の性をセクシャリテイという幅広い概念でとらえるならば、これらのいずれの場にも性教育がある。

学校における性教育の現状をみると、必ずしも目標が明確ではない。そこで、各学校において、目標を設定する必要がある。学校は、児童生徒の人格の完成を究極の目的としていることから、基本目標を、次のように設定することができる。

- (1)男性または女性としての自己の認識を確かにする(異性に対する理解の深化に繋がる)
- (2)人間尊重の精神に基づく動静、異性とのより豊かな人間関係を築くようにする(多様な性についての理解に繋がる)
- (3)家庭や社会の一員として、性の諸問題に適切に対処できるようにする(性の思想、文化、制度、風俗、習慣など、性の諸問題の考察に繋がる)

これらの基本目標は、学校教育の目的である人格の完成を、個人の問題としてとらえる場合には(1)の、人間を社会的存在としてとらえた場合は(2)の、社会集団の一員としてとらえた場合は(3)の目標と一致するという考え方であり、道徳がその内容を「自分自身に関すること」「他の人とのかかわりに関すること」「集団や社会とのかかわりに関すること」に分けていることとも適合する。

講演Ⅱ「総合的な学習の時間と性教育の扱い

田能村祐麒先生

今回の教育課程の基準の改善によって、各学校の教育課程に「総合的な学習の時間」を位置づけることとなった。

この時間の創設の趣旨は、「各学校が地域や学校の実態に応じて、創意・工夫を生かして特色ある教育活動を展開できるような時間を確保する」「自ら学び、自ら考える力などの「生きる力」は全人的な力であることをふまえて、国際化や情報化をはじめ、社会の変化に主体的に対応できる資質や能力を育成するために、教科等の枠を越えた横断的、総合的な学習をより円滑に実施するための時間を確保する」ことである。

「総合的な学習の時間」のねらいは、

○各学校の創意・工夫を生かした横断的、総合的な学習や児童・生徒の興味、関心等に基づく学習などを通じて、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる

○情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表、討論の仕方などの学び方やものの考え方を身に付ける

○問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育成する

であり、これらを通じて各教科等、それぞれで身に付けられた知識や技能などが、相互に関連付けられ、深められ、児童・生徒のなかで総合的に働くようになる。

「総合的な学習の時間」の学習活動については、上記のねらいを踏まえ、地域や学校の実態に応じ、各学校が創意・工夫を十分発揮して展開するものであり、具体的には、例えば、国際理解、情報、環境、福祉、健康など横断的、総合的な課題、児童・生徒の興味、関心に基づく課題や、地域や学校の特色に応じた課題などについて、適宜学習課題や話題を設定して展開するようにする。その際、自然体験やボランティアなどの社会体験、観察、実験、見学や調査、発表や討論、物作りや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習が、積極的に展開することが望まれる。

このような「総合的な学習の時間」の概要を踏まえ、性教育を教育課程にどのように位置づけるかを考えると、学校における性教育の内容・方法の改善が必要となるが、それには、次のような検討課題がある。

- (1)これまでの教育課程に位置づけてきた性に関する授業内容とその扱いをどう改訂するか
- (2)学校の性教育に対する様々な期待をどのように捉え、整理していくか
- (3)各学年段階における横断的、総合的な学習をどう組み立てるか
- (4)総合的な学習の時間における性に関する単元構成をどう整えるか

(5)各單元における授業形態、学習指導方法などをどのようにするか

総合的な学習の時間で性の問題を扱おうとする場合には、人間の性をできるだけ幅広い視野から捉えて単元を構成することが大切である。そこから解決すべき新しい課題を発見することになるからである。

講演Ⅲ「性教育の実践上の諸問題」

田能村祐麒先生

講演Ⅱの内容をより具体的に、小学校、中学校、高等学校の教科・道徳・特別活動の時間と総合的な学習の時間とを対比させた図表をもとに、その取り上げ方の違いなどについて示唆をうける。

(図表は、紙面の関係で無掲載)

校種別研究協議

「新しい教育課程の実施に向けての基本的な課題」「総合的な学習の内容・方法」について、幼稚園・小学校班と中学校・高等学校班に別れて研究協議を行う。

中学校	1年	男・女(性自認)
	2年	対人関係(性にかかわる)
	3年	生命尊重
高等学校	1年	妊娠
	2年	人権と性
	3年	家族(家庭)

講演Ⅳ「教育課程編成上の諸問題」

石川哲也先生

今回の教育課程の基準の改善によって、教育課程に「総合的な学習の時間」が設けられた。そのため、この創設の趣旨を理解し、教科等の枠を越えた横断的、総合的な学習を円滑に実施するための時間を確保することが必要となること、また、この時間のねらいや教育課程上の位置づけや学習活動とその展開の仕方などについて具体的な示唆を受ける。

「多少整理がついた」との感想が聞かれた。

第19回東京都性教育研究大会報告

テーマ 新教育課程と性教育の改善の方向

期 日 平成10年11月19日(木)

幼稚園性教育研究会提言

改善の方向として、「心の教育」「生きる力を育む」ことが求められている。このことについては、①幼児期に自己肯定感と人への信頼感の土台を培うことが重要 ②幼児に接する教師自身の性に対する考え方や性意識の影響が大きいなどの点を考慮することが大きな課題である。

小学校性教育研究会提言

性教育が目指すものは、中教審以降、現在までに答申として出されている関連資料の内容とほとんど一致する。我々は、これらの答申に勇気づけられて、これからの性教育をさらに取り組んでいく必要がある。総合的学習については、各学校で創意・工夫をして取り組めるようになったことにより、性教育をいろいろな活動の場面で取り扱っていくことができるのではないかと考えている。小学校性教育研究会では、性教育をこの総合的学習の時間に取り入れ、どの項目をどのような位置付けで学習できるかを研究していきたい。

中学校性教育研究会提言

性教育そのものが、全ての領域や活動におけるベーシックなものであり、基礎的・基本的な土台となり得るものであるという視点が重要である。我々は、今一度、原点に立ち、性教育が教科・領域のなかで、どのように位置付けられるのか、具体的な例を示していかなくてはならない。その上で、総合的な学習の時間に性教育を積極的に取り入れながら進めていくことが大切と考えている。

その際、ネーミングが大きな要素を持っている。例) ライフステージⅠ・Ⅱ・Ⅲと設定した場合、環境・福祉・性教育など様々な活

動が設定可能となり、植物・動物とのかかわりを性教育との関連で捉えることもできる。各学校で「性教育は、総合的な学習の時間のなかで指導する」ということを声に出して言うことが大事である。

高等学校性教育研究会提言

東京都青少年問題協議会が「青少年が性的自己決定能力をつけるために」の答申で次のことを述べている。『性に関する教育は、生き方や価値観に根ざすものであり、第一義的には家庭において行うべきものである。しかし、青少年の「性的自己決定能力」の育成には、学校教育や社会教育、地域社会の役割が大切となる』。このような視点に立つと、高校における性教育は、以下のような方向性が考えられる。①性教育という言葉の概念の明確化と目標の確認 ②性の逸脱行動に対する対策 ③社会教育などとの連携

高校生は、大人になりきらない大人と言われる。性とは、一生ついてまわるものであり今一度自分の性を見直させ、将来に向かってどう生きていくのかを考えさせなくてはならない。今後も、研究を深めていきたい。

心障児性教育研究会提言

21世紀の教育課題「生きる力の育成」が叫ばれているなかで、心身障害教育における性教育として力を入れることは、次の通りである。①主体的に学び、自ら考え、判断し、行動する力の育成を目指した性教育プログラムの作成。②個に応じた指導の重視と総合的学習の時間の有効活用。③人間尊重の心を培う保護者・地域社会との連携・協力。

以上のことを有機的に考えて進めていくべきであると考えている。

講演会

演題「国際的に見た日本の子どもの姿」

講師 千石 保〔日本青少年研究所長〕

(1) 日本の子ども

現在の日本の子どもは、コンサマトリーの考え方が非常に強い。日本は、高度成長期を経て、1970年代に入り、「ジャパニーズ NO1」になった頃から、日本の子どもたちに変化が起きたと感じる。子どもたちのなかに理念・目標がなくなっている。学級崩壊（崩落）も、子どもの規範意識が低くなり、良いこと、悪いことの判断ができないことややる気がないことなどが大きな原因となっている。

○コンサマトリー（即時享楽志向）

- ・何か目標があって、その手段や意味に意義を感じるのではなく、今、自分がやっていることに意味を見いだす
- ・今が楽しければいい、先のことは考えない



○インスツルメント（方法手段が大事）

- ・生産を上げるという目標があり、その手段として、一生懸命働く。やがての幸福のために、今、頑張っておくという考え。

(2) 家庭のしつけ

日本では、耐える、我慢するということが美德ではなくなってきた。

—日本—

- ・自分も楽しまなくては・・・という母親
- ・夢を子どもに託し、頑張って！頑張って！と全てを抱え込んでしまう母親
- ・子どもを叱れない家庭の増加
- ダメなものは、ダメと言えない傾向
- 子どもが自立しにくいような過程を取っている

—アメリカ—

- ・しつけで教育する
- ①正直になりなさい
- ②自分が損をしても正しいことをしなさい
- ③人のコピーになるな
- ダメなものはダメという傾向
- 子どもが自立しやすい過程を取っている

(3) インディ ビジュアル（個人主義）

「自分で責任を取る、自立している」ということ

日本は、近代社会になっていないと思う。それは、インディ ビジュアルではないのに、民主主義と自由を与えた。赤ん坊の時代から理念をかがね、インディ ビジュアルを育てていく必要がある。善悪が分かる子ども、懲罰の分かる子どもを育てる教育を、今から始めなくてはならないと思う。

以上、今回の研究発表による研修により、今後の各学校における性教育の実践や教育課題の克服に大いに役立ち、併せ、指導者の資質の向上に成果があった。

都性研 宿泊研修会報告

日時 平成11年1月30日(土)～31日(日) 場所 川治湯元温泉

講演「教育課程の基準の改善と性教育の在り方」

講師 田能村 祐麒 先生

平成元年の学習指導要領の改訂に当たってマスコミは、小学校で性教育を行うようになったといった不適切な報道を大々的に行ったが、今回の改訂は、前回の改訂よりさらに重要な課題を抱えているにもかかわらず、誠に平静である。もし、性教育をどう改善しなければならないかをつかめていないのだとすれば、まず、教育課程の基準がなぜ、どのように改善されたのかを理解し、それが性教育とどのようにかわりがあるのかを考える必要がある。

学校における性教育は、これまで、様々な研修会などで学んできた教育課程の基準の改善の基本方向のねらい、それに基づいて改訂される学習指導要領などによって、その内容・方法の改善を図らなければならない。

それには、次のような、基本的な課題と実践上の課題が考えられる。

基本的な課題は、学校が実施する性教育とは、どういう教育活動なのか、また、それに対する社会的期待はどのようなものかを、教職員が理解し、認識しているかということである。しかし、中教審の答申にも、教課審のまとめにも、性教育に関する記述はない。また、「性教育」に関しては、教職員の間に多様な意識や見解があって、学校としての組織的、計画的な研究・実践が困難であったり性教育の目標が明確でないため、学習内容の選択が断片的であったり、指導計画が主題の寄せ集めにすぎず、内容の系統性や発展性に欠けているといった例が少なくない。

そこで、「生きる力」育むことに、性教育がどうかかわるのか、性教育は、どうあればよいのかを考えたり検討する必要がある。

実践上の課題は、教育課程の基準の改善のねらいや新学習指導要領の実施に伴う性教育の内容・方法の改善についてであり、具体的には、新学習指導要領による教科・道徳・特別活動の内容として示された、あるいは、それに関連した性に関する内容の取り扱いの問題、及び新設される総合的な学習の時間における「性」に関する学習の問題である。

この場合、学校の性教育に対する社会的期待の内容をどう取り上げていくかが重要な課題となる。

社会的期待についての具体的な提言のいくつかを取り上げる。

保健体育審議会は、その答申のなかで、「21世紀に向けた健康の在り方」について、「今後とも、時代の変化に対応し、健康の保持増進を図っていくため、ヘルスプロモーション(人々が、自ら健康をコントロールし、改善することができるようにするプロセス)の理念に基づき、適切な行動をとる実践力を身に付けることが、ますます重要となる」とした上で、健康に関する現代的課題の背景と要因について「児童・生徒については、薬物乱用、性の逸脱行動、肥満や生活習慣病の兆候、いじめや登校拒否、感染症の新たな課題等の健康に関する現代的課題が近年深刻化している。これらの課題の多くは、自分の存在に価値や自信を持てないなど、心の健康問題と大きくかかわっていると考えられる。これらの心の健康問題の要因は、一様ではないが複雑化した現代社会において、職場や学校における人間関係や家庭環境が複雑に絡み合いストレスや不安感が高まっていること、都市化や核家族化、少子化の進行、あるいは遊び

環境など子どもたちを取り巻く状況の変化等を背景に、子どもたちの心の成長の糧となる生活体験や自然体験等が失われてきており、自己実現の喜びを実感しにくく、他者を思いやる温かい気持ちを持つことや望ましい人間関係を築くことが難しくなっていることなどが大きな要因となっていると考えられる」としている。

また、性の逸脱行動については、「援助交際などの性の逸脱行動は、社会的に認められないものであるとともに、人格を直接傷つけ心と体の健康を損なう行為と言える。したがって、体育、保健体育、道徳、特別活動等、学校教育活動全体を通じて、それぞれの特質に応じ、性に関する指導の充実を図る必要がある。このため、教科等における性に関する指導に当たっては、自他の心身を大切にするという心の健康について、児童・生徒が主体的に考える態度を育成していくことを基本とし、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を具体的な生活場面で生かせるよう、発達段階に応じ、人間としての在り方、生き方に関する教育を充実していくことが必要である。

その際、男女が相互に尊重し、健全な異性観を持つようにするとともに、思春期における心身の発達や健康問題について、特に、性的成熟に伴う心理面、行動面、生活面の変化について、適切な自己判断、自己決定ができるよう支援することが重要である。また、性の逸脱行動が社会的に認められないものであるという基本認識の下、各教科等における指導を有機的に関連づけ、児童・生徒が人間の性に対する理解や認識を深めるとともに、健全な態度や行動を身に付けさせるよう取り組む必要がある」としている。

次に、1990年にWHOによって提唱されたリプロダクティブ・ヘルス/ライツという概念である。これは、「生殖の過程において単に疾病や異常が存在しないというだけでなく、身体的、精神的および社会的に完全な

状態で遂行されること」と定義されている概念である。この言葉は、1994年に国連が開催した第3回国際人口・開発会議で「リプロダクティブ・ヘルス/ライツの確立を目指し、近代的家族計画を普及させる」という行動計画が採択されたことを契機に、世界中に広がり重視されるようになった。この「行動計画」では、青少年が、性教育やカウンセリングサービスを通じて、自分の性について理解し、望まない妊娠、性感染症や不妊症になる危険から自らを守ることを提案している。また、「思春期の若者のリプロダクティブ・ヘルスに関する問題への取り組みが必要であるし、そのためのサービスが提供されるべきであると提言している。近年、これが概念や行動計画が、思春期の性にかかわる保健・医療関係者の間にも浸透し、性教育や性に関する相談活動が積極的に推進されるようになってきており、学校における性教育も、この概念を積極的に受入れ、保健・医療関係者等との連携を密にして、その改善・充実を図っていく必要がある。

男女平等教育の推進と性教育の関連であるが、「西暦2000年に向けての新国内行動計画」を策定し、「男女共同参画型社会を目指す」をテーマに、五つの基本目標と16の重点目標を掲げている。そのなかで「男女平等と男女の相互協力・理解を進めるための学校教育の充実」が求められ、教育課程の編成に当たっては、男女平等を意図的・計画的に位置づけ、内容の体系化を図ることが必要であるとされている。

その他、都青少年問題協議会が、その答申のなかで、「青少年の性的自己決定能力を育むための施策として、次の提言をしている。

- ①学校における性教育への積極的な取り組み
- ②社会教育の場におけるプログラムの検討
- ③思春期の青少年に対する相談体制の充実
- ④性意識を阻害する環境を改善する働きかけ
- ⑤性的被害等当該者に対する配慮体制の充実

第28回全国性教育研究大会報告

東京都立江戸川高等学校 井口一成

『命と人間の尊重を考える一人間の性と性教育の原点から』という基本テーマを掲げ、平成10年8月6日夜にはプレコンgress、7日から9日の3日間は、秋田県民会館を中心に大会が開催された。

21世紀を前に、こらからの学校は「ゆとり」のなかで「生きる力」を育む教育が必要であり、それには、家庭や学校、地域社会が十分に連携し、バランスよく教育に当たることが重要といわれる。

また、保健体育審議会は、健康に対する現代的課題が深刻になっているとして、心の健康問題を取り上げ、特に、人間の性に対する理解や認識を深める必要があると述べられている。

そのような状況になかで、性教育の原点に立って開催された大会は、東北3大まつりの竿灯祭の熱気に包まれながら、大会が始まった。

6日のプレコンgressでは、『性に関する指導の手引き（仮称）』（文部省）の要旨を、東京都教育委員主任指導主事の柿添賢之氏が講演された。新しい手引きの作成に直接携わっただけに、内容も分かりやすいものであり、学校現場で、今後活用することになる私たちにとって得がたい研修の機会となった。

7日の全体会では講演1では『これからの教育を考える一生きる力を育む教育課程』と題して講演が行われた。講師は、東京学芸大学教授であり、第15期中央審議専門員の児島邦宏氏である。

改めて「生きる力」に焦点を当て、学校や教師の発想を転換していくことが、いかに重要であるかを再認識させられた。

講演2『生きものの性』では、秋田大学名誉教授の山本穆彦氏で、生物にとって性とは何かという大変難しい内容を、豊富な事例を

元に和やかな雰囲気の中でユーモアたっぷりに講演された。

受精とは、適者生存をはかるための遺伝子の混ぜ合わせであること、また、美についての話題や、よりよい異性を求めて様々な熾烈な争いといった性の生殖戦略、受精の複雑なメカニズムの一端について等々、生物学上の興味深い話を聞くことができた。

講演3『メディアと性』では、成城大学教授の石川弘義氏から、性情報に関するメディアの効果・影響について講演があった。

マスコミの働きについて、たとえば時代の考え方が次第に固まっていく「アジェンダ・セッティング機能」などいくつかの仮説を話された後、子供たちの性情報の種類について話された。

講演のなかで、ポルノグラフィーは、ある程度の学習効果を持つが、心の深いところに影響を与える「ポルノ+暴力」の性情報源としてのインフォーマルな情報について話された。

講演4『日本人と性』では、ジャーナリストむのたけじ氏が、機関銃のように飛び出すユーモアと圧倒的な気迫で、90分の講演を行った。

氏の性の話題は、古事記から国際問題まで、多彩にわたっており、特に夜這いについて、昭和20年代前半の民族学的な話題や東北の冬の勇壮な祭り等の話は、長年の聞き取りや足で稼いだ事実ならではの迫力を感じた。

8日は、各分科会で熱心に討議された。私は、“自己決定能力を育てる性の指導”で組織的に行っている、東京都立江戸川高等学校の報告を行った。

以下は、分会会でのレジメである。

科学技術の急速な進歩、情報化・国際化の進展、社会状況の激しい変化は、生徒の家庭

環境を大きく変えつつある。核家族化や少子化傾向が進むなかで、共働き家庭が増加し、地域における子どもの群が消滅して各種の生活体験の不足や人間関係の希薄化が指摘されている。

このような状況のなかでは、明確なアイデンティティを身に付け、正しい情報選択や行動選択ができるようになることが必要である。

それには、生徒に対し身体の発育や性的な発達を明確に理解させ、疑問や不安を解消させるとともに、男女の豊かな人間関係を築き、性に関する諸問題に対し、主体的に判断し行動できる能力を身に付けさせることが大切であると考えた。

1. 研究組織

(1) 本校生徒の実態を把握し、実態に応じた指導方針を明確にし、研究活動を実践する。

(2) 社会背景や科学技術の進展を配慮した年間指導計画の在り方を検討する。

(3) 保健体育科以外の教科との関連を図り、指導内容に関連を持たせ、性教育の充実を図る。

(4) 各種の研究会・研修会への積極的に参加し、校内学習会で報告し、研修内容の共有化を図る。

(5) 性教育の専門家から積極的に指導・助言を得る。

(6) 性教育を「人間尊重」の精神を基盤とした、生命尊重・人格尊重・男女平等の教育としてとらえ、進めていく。

(7) 主題をどのように具現化するかを検討する。

2. 校内研究組織

○校長を中心に、保健体育科教諭7名及び、養護教諭で組織した。

○研究会は、毎月一回の例会を実施し、性教育の授業終了の11月には、来年度へ向けて内容の見直しを図った。

3. 研究内容と方法

毎年、授業開始前と授業終了時のアンケート・感想文、テストなどから、生徒の声を聞き、年間計画に取り入れ授業を展開してきた。

また、他教科との性教育にかかわる情報交換を行い授業に取り入れた。

各種研究会（都性研・高性研・エイズ教育学会・全性連全国大会）にも積極的に参加し年間指導計画の作成に役立てた。また、前年度の実践の成果を分析・考慮し、研究主題に即したカリキュラムの作成、指導内容等の検討を保健体育科全員で共通理解を図りながら行った。

4. 実態調査の実施

本校では、東京都保健体育研究会第6支部で実施している「性に対する調査」を毎年実施している。これは、各年の生徒の性に関する意識、知識、理解を調査し、前年までの傾向と比較・考察し、指導の指針となっている。

性教育の授業が終了する11月には事後アンケートを行い、学習の理解や意識変化について調査している。これらを集計、考察の指導することは、年間の性教育の実践を評価し、来年度に向けての指導の方向性を見いだす上で大変有効であると考えたからである。

9日は、全体会で、講演5『生命の誕生と人間尊重』では針生産婦人科・内科クリニック医院長の針生峰子氏による、生命誕生の仕組みや人工授精・体外受精と倫理的問題、母子感染等医学的領域からの講演があった。

特別企画の講演と体験発表は『老いること・死ぬこと・生きること』日本赤十字秋田短期大学長の竹本吉夫氏より、「老いと死をめぐって」という内容で、病気について、老いについて、死についてやさしい言葉で人の生と死についての深い示唆を得られた。

その後、小学生、中学生、高校生の3組からお年寄りとの体験学習で学んだことについてのすばらしい発表があり、あちらこちらですすり泣く声が会場に響いていた。

第8回 関東甲信越静性教育研究大会報告

都立江東工業高等学校 矢野 美智子

第8回 関東甲信越静性教育研究大会が、11月8日(日)に、埼玉県上尾市コミュニティセンターにて開催された。

今年度の基本テーマは、『豊かな心を育てる性教育をめざして』と題し、午前中二つの講演があり、午後は7分科会にわかれ、研究協議が行われた。

<講演Ⅰ>

演題「現代の青少年の性意識と性をめぐる諸問題」

講師 科学警察研究所補導研究室長

内山 絢子女史

「補導研究室の仕事は、主に調査・資料のまとめを行っている。」という話から始まり、性に関する意識調査は、(1)家庭(2)学校(3)社会の三つから得られる。この三つの環境の中で生きる子どもたちをどのように育てるかを考える手だてとして、調査を実施する。

性の商品化に関する意識調査では、

- ・知らない人と喫茶店でお茶をする。
- ・使い古しの、制服を売る。
- ・使い古しの、下着を売る。
- ・ボルノ雑誌のモデルになる。
- ・アダルトビデオのモデルになる。
- ・知らない人とのSex

などがあげられる。

『なぜ?そういったことを行うのか。』ということについては、家庭の問題として次のようなことがあげられる、

- ・親がわかってくれない。
- ・よく喧嘩をする。(夫婦・親子)
- ・父親の異性関係がある。
- ・母親の異性関係がある。
- ・父親と子どもがうまくいかない。
- ・母親と子どもがうまくいかない。

・親の離婚経験がある。

社会的問題としては、羞恥心の感情がなく、社会的のモラルの欠如が考えられる。

今の子どもたちは、援助交際・売買春を、あたりまえのこととして、捉えている。

スクリーンを活用して、わかりやすく青年の実態を話していただいた。最後に、我々大人が、これからの青少年を育てる上で、何が必要かということ、『セルフエスティームの高い子どもたちの育成につとめることが、大切である。』と締めくくった。

<講演Ⅱ>

演題「生きる力を育てる性教育」

——これからの性教育を考える——

講師 全国性教育研究団体連絡協議会

理事長 田能村 祐麒先生

性教育の概念とその基本的な目標の理解と認識についての話があり、その後、「生きる力」の育成と性教育の意義や役割についてのお話があった。

「生きる力」と自己の性の認識を確認すること・・・児童・生徒のジェンダー・アイデンティティを育てることが「生きる力」を育むうえできわめて重要である。

「生きる力」と同性・異性との豊かな対人関係を築くこと・・・承認欲求や自尊感情の充足など児童・生徒の情緒の安定に力を注ぐとともに、発達段階に応じて対人関係のスキルを習得させることが必要である。

「生きる力」の育成と家庭や社会の一員としての性の学習・・・家庭や社会の一員として必要な性に関する基本的、基礎的事項を理解し、性的事象に対する洞察力や判断力を培うとともに、性に関する道德意識や倫理観を養うことが大切である。

「生きる力」と他者の「生き方」の尊重について・・・人間が生きていく場合、だれもが平等に人間としての生活をする権利や幸福になる権利をもっており、それは、理由なく阻害されてはならない。人間尊重の精神の徹底を図ることが必要であり、このことに対する性教育の意義や役割はきわめて大きいと言える。

この後、性教育の内容の選択と組織についての話があり、おわりに、これからの性教育は、知識内容を教えるのではなく、学び方やものの考え方の習得を重視すること、体験的学習や、問題解決学習を重視することなどが求められており、これらの観点からの工夫改善が必要である。

午後からは、7つの分科会にわかれ研究協議が行われたが、私は、第5分科会の『性の社会問題への対応をどう進めていくか』に提案者として参加した。

私の他に、東京都小平市立小平第五中学校教諭 正田哲也先生、群馬県立伊勢崎女子高等学校 養護教諭 津久井重美子先生の三人で提案をした。

正田先生が、「指導者自らが実感し具体的なテーマで授業を」と題して、思春期の青少年の発達に適応した授業内容を設定し、彼らが性教育に何を求めているのかを的確に捉え、学習テーマを具体的にする。

『性の意志決定』へとつながる性教育の授業の工夫として、ゲームやロールプレイ等をうまく取り入れた授業方法をビデオを使って提案した。

次に、津久井先生が、「援助交際を考える」と題して、事例を通して提案があった。

援助交際・・・売りのような明確なケースはあまり浮上してこないものの、生徒を取り巻く環境は、一歩間違えるととんでもない危険な環境になってきている。

相手に悪いとか、相手に嫌われたくない、

失いたくないと相手の言いなりになってしまい後悔する。後悔するのは悔しいので、自分の行動を正当化しようとする。強がりを言ったりする。そうなる前に、流されることなく自分の意志で行動選択できる人に成長して欲しい。

女生徒の意識の変革を迫るには、どう指導すればよいか、提案した。

私は、「青少年の性の逸脱行動について」援助交際など性の逸脱行動が起こる背景はなにか？

上記のような問題を起こさせないためにはどんな支援ができるのか？を提案した。

『援助交際など性の逸脱行動』が起こる背景は何か。

<子ども自身の問題>

- ・受験戦争の狭間で生きている。
- ・みんながやっているから、わたしも・・・
- ・友人とのつながりが物品での交流でしかない。
- ・自分の価値観をみせるため。

<保護者の問題>

- ・性的な考えとしてとらえていない。
- ・性教育を受けないで通り過ぎた。
- ・「自分の子だけは、違う。」
- ・「うちの子に限って。」

<学校（教師）の問題>

- ・現状を理解していない。
- ・性教育をどのようにすすめたらよいか、わからない。
- ・家庭教育の問題 → 学校は関係ない。

<社会の問題>

- ・マスメディアの影響
- ・大人社会の影響（不倫・愛人問題）
- ・セクシャリティをどうとらえているか。
- ・男社会のあり方（売春認容の風潮）

問題を起こさせないためには、どんな支援ができるか。

＜子どもたちに対して＞

- ・子どもと語れる指導者に。

＜学校教育の場で＞

- ・教科だけの指導ではいけない。
- ・校内研修の充実。
- ・校内での指導体制の確立。

＜社会として考えられること＞

- ・社会環境のたてなおし。

＜保護者として＞

- ・親子関係のたてないおし（親の威厳・父親像・母親像）

三人の提案の後、協議会が行われた。

援助交際について、大人の立場で……

- ◆男女とも、30才代の浮気率が高い。男性は、若い女の子が好き。プレゼントの高額化。
- ◆好きになったら、大人の付き合い。性に関してオープンになったのか、墮落したのか
- ◆「援助交際」という言葉のぼかし。
- ◆男性の性・女性の性の違い。
- ◆対人関係の希薄さ。
- ◆病気についての不安はないのか。エイズ・クラミジア等について。

〔講評〕

科学警察研究所補導研究室

室長 内山 絢子女史

学校は抱え込まないで、外部との連携をとり援助の手を受けることが望ましい。

専門家との連携をとりあって、子どもたちに支援する。

被害者対策（性被害対策）……レイプ、性的虐待は、被害者が告訴しないと取り締まれない。警察の取り調べがつらいので、申し出る被害者が少ない。

＜子どもの性被害＞

家庭内での性的虐待は、みんなで虐待と認め合う姿勢が必要。

＜男の性被害＞

男と男の関係の被害も少なくない。

＜女子高生の場合＞

相手に求められたら、断れない。

捨てられたくなかった。

男女交際の失敗→失恋も人生のうえでは、必要である。

教育の現場では、現状から目をそらさないで、教師が子どもと向き合うことが大切である。教育論より実践論が必要である。

I. はじめに

都性研 99 年調査（通算 7 回目）が終わり、現在、校種別の考察がすすんでいる。高性研事務局から今回調査の集計表が届き、同時に本紀要への投稿文の請求があった。

テーマは自由といわれたが、私は第 1 回（81 年調査）から関わり、今回調査にも少なからず関心があり、「自己の性認識・受容」を切り口に起稿してみた。

取り上げた質問は、「あなたは、自分が男性または女性に生まれたことを、現在どう考えていますか。」で、回答選択肢は、①よかった ②反対ならよかった ③どちらともいえないである。

★ 84 年調査＝①よかったの性差は 25 ポイント。自己の性に利益・不利益の視点があるのか、特に女子の動揺にふれ、小 5 から中 1 への減少、中 3 で反騰、高 1 からの低下・高 3 でやっと上向きに...と進路選択・交友関係・など自己変革の節目で影響を受けていると考察。

さらにキスや性交の有経験者抽出から有経験者ほど自己の性を肯定的（よかった）と評価し、自認度が高いとクロス考察している。

★ 87 年調査＝僅かな学年差と明確な性差があり、過去調査をみると、②反対ならよかったが、男子の増加・女子漸減を指摘。男子ほど社会から期待される性役割に対し、現実体験として圧迫を感じ、動揺していると報告。

表 1

男性(高校全学年)							
	81調査	84調査	87調査	90調査	93調査	96調査	99調査
よかった	77.1	74.4	73.4	72.9	71.8	71.6	66.6
反対ならよかった	2.4	3.7	3.5	3.1	4.8	4	4.3
どちらともいえない	20.5	21.9	23.1	24	23.4	24.4	29.1
合計	100	100	100	100	100	100	100
調査数	511	1,229	1,255	1,438	2,141	1,540	1,550
女性(高校全学年)							
	81調査	84調査	87調査	90調査	93調査	96調査	99調査
よかった	51.8	49.4	49.7	52.4	54.4	56.1	53.9
反対ならよかった	13.6	15.3	15.4	16.4	14.3	10.9	11.3
どちらともいえない	34.6	35.3	34.9	31.2	31.3	33	34.8
合計	100	100	100	100	100	100	100
調査数	488	1,173	1,972	1,478	2,178	1,631	1,589

II. 各調査年の考察（表 1 / 図 1 参照）

★ 81 年調査＝仮説として、自己の性自認は、性意識・性行動を形成する大きなファクターとし、①よかったの男子 77.1%>女子 51.8%の性差は予想どおりと述べ、それぞれの数値は少なすぎるの記述がある。それは、前思春期から思春期の性自認の動揺は、高校生期では安定しているはずという仮説があったからである。

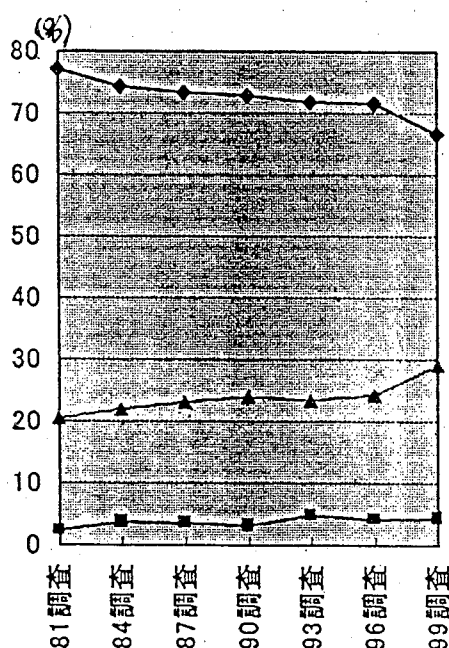
★ 90 年調査＝若者が、自己の性的存在を認めつつ、具体的な利益・不利益の体験・周囲や社会の期待に対して抵抗感や反発心を持つ場合、指導者は、児童生徒の自己実現を支援するために、本調査の結果を性教育の課題と受け止める必要がある。

★ 93 年調査＝③どちらともいえないの場合や②反対ならよかったなど、性受容の消極的

態度・否定的態度は、自分が決めてしまった男性観や女性観に自縄自縛の状況があるかも知れない。小学・中学時代の動揺や何らかの重圧が解決できず、高校まで引きずっているなら、教室でのロールプレイなど、指導方法上の工夫を試みる必要がある。

★ 96 年調査＝生徒を理解する立場から、③どちらともいえないは、消極的態度ではあるが、自己の性を善し悪しで評価しないの意味で、一概に性受容不十分とか、否定的であると解釈すべきではない。

図 1 a 性認識・受容の推移 (男子)



男女平等意識の浸透や女性差別撤廃を目指す社会の動向は、高校生にも男性性・女性性への新しい視点を持てるように働いている。

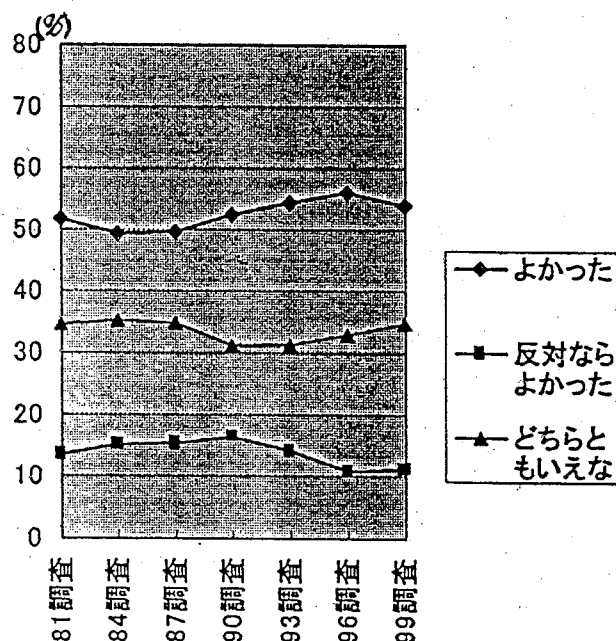
教育上の課題として、生徒に対して、自己の性受容に際し、利害得失の目盛りを排除するように求めたいと記述し、加えて性教育で、新しいホームプロジェクト構想や男女共同参画社会のあり方をテーマとし、家庭科や現代社会などを軸に適切な教材開発が期待されている。

Ⅲ. 99年調査の場合(図2ab参照)

①よかったは、81 年調査の性差 25 ポイントから、調査ごとの男子の下降・女子の横ばいまたは上昇傾向から 96 年調査 (男子 71.6%>女子 56.1%; 性差 15.5 ポイント) まで接近した。

これは 99 年調査で、男子の③どちらともいえないが前回より 5 ポイント上昇に影響され、①よかったが、男子 66.6%>女子 53.9%と共に減少している。(図 1 a b 参照)

図 1 b 性認識・受容の推移 (女子)



現在、99 年調査結果は、データを調査協力の生徒に戻し意見交換してない段階にあり、前回までの中学調査を参考にしても考察しにくい。従来の考察手法に加え、新しい視点をもうける必要が生じている。

JASE 現代性教育研究月報 2 月号の記事、◆言葉を読み解く;兵藤智佳の「ジェンダー」って何? や疋田哲也(小平 5 中):生徒の考えた「あなたの性度は?」に、視点を変えするためのヒントが有りそうだ。

84 年調査考察のように、Q1「自己の性認識・受容」をフェースシート（基礎項目）の一つと考え、他の性意識・性行動調査項目とクロス考察する必要もある。過去調査で試みたように生徒の意見を集める方法もある。

以下、本稿でそのことを考える。

IV. 発想の転換（その1）

映画「男はつらいよ」を引き合いに出す。寅さんは、人よんで「フウテンの寅」である。

「つらい」「フウテン」の単語には、マイナーなイメージ（卑下）があるが、どの作品でも、車寅次郎は、自分を見失うことなく確固としたアイデンティティを持ち続けている。

この寅さんに、本稿の「性認識・受容」を質問すると、どんな回答が得られるだろうか。

仮説だが、おそらく、①よかったと回答するにちがいない。あるいは、「しょうもないこと質問して……」と内心思いながら、こちらを傷つけまいと考え、③どちらともいえないを選ぶこともあり得る。

何故なら、寅さんは、本心から「男はつらいよ」と思ったことはなく、啖呵きつてでも自分の男性性を自負しながら生きているし、どう考えても②反対ならよかったに回答すると思えないからである。

もう一つは、質問が「あなたは……現在どう思っていますか」であり、少年時代から「偉い兄貴になりたいくて」と思い続けての奮闘努力（？）が現在も続いているため、「②反対なら……」に考えが及ぶことはない」である。

V. 発想の転換（その2）

ハワイ大学のM. ダイモンド教授の提唱する

「性的な自己決定をするにあたって留意すべき基準」の一つに、「個々の事実は、人と社会に対する態度あるいは感情により色づけられている（あなたにとって、また社会にとって、その事実は何を意味するか？）」がある。

日本子ども家庭総合研究所のチーム研究（著

者も加わっている）「若年者の性についての意識と行動に関する研究」（代表・宮原 忍）は、97年度の文献調査につづき、98・99年度は、「青年の性と生活に関するアンケート調査」による研究である。

調査対象を高校生・大学生とし、今、調査を終わり集計段階だが、調査項目は、JASE・都性研等を参考に、「自己の性受容と自分自身に関して」本稿と同じ質問に加えて、次の調査をした。

◆あなたは現在自分をどう思っていますか？

- 7. 自分が好きである
- 1. 自分には魅力がある
- 9. 自分は平均的である
- エ. 自分はいかなる人間だ
- オ. 自分は運が悪い

i) そう思う ii) そうは思わない

iii) どちらともいえない チェック方式回答。

◆あなたは、自分が《男である・女である》ことをよかったと思う あるいはいやだと思うのは、どのような場合ですか？

家庭で、学校で、社会（慣習やしきたり）で、雇用や職場などで生活の場ををあげ、

A. よかったと思う場合

優遇される、期待される、能力がある、差別された立場や弱者の視点で考えられる、らしさを備えている、理屈抜きによい等々。

B. いやだと思う場合

差別される、期待に応えなくてはいけない、行動力がない、同性の考え方・行動パターンがいやだ、理屈抜きにいやだ等々。

新世紀を担う青年の性意識と生活が調査結果にどう映し出されるか、楽しみである。

VI. 結び

平成 10 年版「厚生白書」がすばらしい。
文部・厚生・労働・建設 4 大臣合意(平成 6)
「エンジェルプラン」を強く意識し、従来の
型を破り、「子どもを生み育てることに夢を
持てる社会」を主題に編纂されている。

そして本年 3 月、児童家庭局が「育児をし
ない男を父とは呼ばない。」のポスターを全国
配布(「妊娠や出産が女性にしかできない大仕事な
ら、育児は男性にもできる大仕事なのではないでしょ
うか」と強調)。

これに朝日新聞は「父は育児なしじゃない」
と「意気地なし」にかけて記事にした。

両者共に発想の転換が見事である。

「思春期学」を学ぶ場合、子ども達の発信
するシグナルを謙虚に、新しい視点で考察で
きるよう、ずっと柔軟な頭脳を持ち続けたい。

図2a. 99年調査(高校男子全学年)
調査数 N=1550名

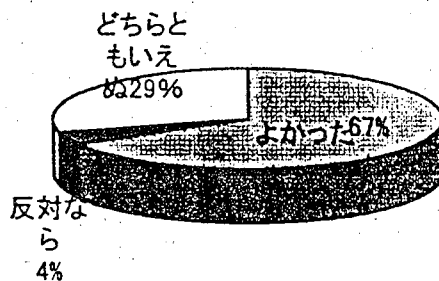
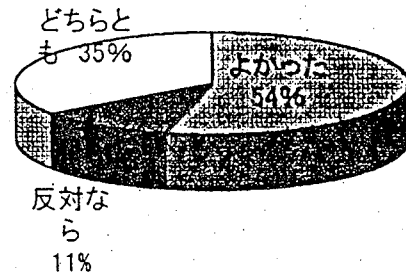


図2b. 99年調査(高校女子全学年)
調査数 N=1589名



東京都高等学校性教育研究会会則

第一章 総 則

- 第1条 本会は、東京都高等学校性教育研究会と称する。（略称 都高性研）
- 第2条 本会は、高等学校における性に関する指導を重視し、その必要性を認識する者により組織され、次の事項を目的とする。
1. 学校教育における性教育の在り方、進め方に関する実践的研究を行う。
 2. 性教育を通して、生徒の健全育成に関する研究を行う。
 3. 人間の性に関する研究を行う。
- 第3条 本会は、第2条の目的達成のために、次の事業を行う。
1. 研究協議会・講演会・公開授業などの開催。
 2. 調査研究、情報の収集。
 3. 各種機関・団体との連絡・提携。
 4. 研究集録などの発行
 5. その他、本会の発展に必要な事業。

第二章 組 織

- 第4条 会員は、都内の高等学校教員および第2条の目的に賛同する者をもって組織する。
- 第5条 本会は、次の役員を置く。
- ・会長（1名） ・副会長（若干名）
 - ・常任理事（若干名）
 - ・理事（若干名） ・会計（2名）
 - ・会計監査（2名）
- 第6条 役員の選出は、総会において行う。
- 第7条 役員の任務は、次のように定める。
1. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
 2. 副会長は、会長を補佐する。
 3. 常任理事・理事は、会務を処理する。
 4. 分掌は、事務・会計・研究・調査

・広報の5部門を置く。

5. 会計は、経理を担当する。

6. 会計監査は、本会会計について監査する。

第8条 役員の任期は、2年とする。但し、再任は妨げない。

第9条 本会には、顧問を置くことができる。

第三章 会 議

- 第10条 本会の会議は、総会・定例会・理事会および各部会とする。
- 第11条 総会は、会長がこれを招集し開催する。
- 第12条 総会は、毎年1回開く。但し、必要ある場合は臨時に開くことができる。
- 第13条 総会に付議する事項は次の通りである。
1. 事業計画の決定
 2. 予算および決算の承認
 3. 役員選出および承認
 4. 会則の変更
 5. その他の重要事項

第四章 会 計

- 第14条 本会の経費は、会費およびその他の収入をもってこれに充てる。
- 第15条 本会の会計年度は、毎年4月1日より翌年3月31日までとする。
- 第16条 本会の会費は、学校単位として、年額次の通りとする。
- ・全日制 2,800円
 - ・定時制 1,400円

第五章 付 則

- 第17条 本会の事務局は、事務局長の現任校に置く。
- 第18条 会則は、平成元年4月1日 一部改正。
- この会則は、平成10年5月29日施行する。

平成10年度役員

会 長	黒瀬忠生	本所高校長
副会長	小泉 功	小金井北高校長
〃	竹内 章	久留米西高教頭
〃	筒井邦夫	大泉北高教頭
〃	正角良子	武蔵丘高教頭
研究部長	土崎祐一郎	蒲田高校教諭
副 〃	川端利昭	城北高校教諭
調査部長	柳瀬さち子	園芸高校教諭
副 〃	井口一成	江戸川高校教諭
広報部長	榎 茂喜	府中東高校教諭
副 〃	相川 玲	向島商高校教諭
事務局長	川端洋介	光丘高校教諭
副 〃	井谷 享	武蔵高校教諭
会 計	矢野美智子	江東工高校教諭
〃	山元和三	第三商高校教諭
会計監査	高梨 昭	小石川高校教諭
〃	黒沢順子	深川高校定教諭
常任理事	田原正之	両国高校教諭
〃	林 正	関東一高校教諭
〃	塚越恵美子	赤羽商高校教諭
理 事	柴崎英樹	篠崎高校教諭
〃	増淵達夫	千歳高校教諭
〃	尾崎武彦	向丘高校定教諭
〃	青田雅樹	淵江高校教諭
〃	柳下ひとみ	大泉学園高教諭
〃	塚本久美子	水元高校教諭
〃	村上春代	水元高校教諭

*会員校（会費納入校108校）

〔都立高校全日・定時制24校〕

1 小山台	7 池袋商
2 葛飾商	8 深川
3 江戸川	9 都立大
4 北園	10 北多摩
5 豊島	11 小岩
6 羽田	12 荒川商
13 雪谷	19 小松川
14 中野工	20 荻窪

15 第五商	21 葛西南
16 城北	22 上野
17 東	23 桜町
18 第四商	24 久留米

〔都立高校定時制4校〕

1 五日市	3 赤羽商
2 八潮	4 代々木

〔都立高校67校〕

1 拝島	24 東大和南	47 大泉北
2 小金井北	25 城東	48 国分寺
3 日野	26 南平	49 神津
4 江東商	27 秋留台	50 淵江
5 水元	28 江東工	51 光丘
6 白鷗	29 武蔵	52 本所
7 豊多摩	30 小平南	53 東村山西
8 練馬	31 野津田	54 竹台
9 新島	32 小川	55 篠崎
10 調布南	33 日野台	56 北野
11 府中東	34 桜水商	57 田無
12 園芸	35 多摩工	58 府中
13 小石川	36 大島南	59 南
14 深沢	37 永山	60 大泉
15 両国	38 山崎	61 小笠原
16 砧工	39 狛江	62 城南
17 第三商	40 府中西	63 千歳丘
18 保谷	41 調布北	64 田柄
19 日本橋	42 大森東	65 高島
20 玉川	43 田園調布	66 飛鳥
21 晴海総合	44 井草	67 八王子高陵
22 墨田川堤	45 武蔵村山	
23 武蔵丘	46 永福	

〔私立高校13校〕

1 明治学院東	6 成城	11 帝京
2 八王子実践	7 八王子	12 成城学園
3 家政大付属	8 日体江原	13 順心女子
4 富士見	9 宝泉学園	
5 恵泉女学院	10 玉川聖学院	

あ と が き

会誌「あふるる」創刊号

終わりのないはじまり

中学2年の夏、突然に自分の身に味わったことのない快感を経験しました。それ以来、異性への関心が高まり、大人になったと実感していました。そんなある日、母親が私に男女の性について詳しく話をはじめ、「自慰行為は、正常な男であればあるのが当然、不衛生にならぬように」と、何でも見透かしているように、注意されました。今日の親たちが子供の身体の変化や性について、どれだけ助言ができるだろうか。と、母親のことを思いだしました。

情報化の進歩のなかで性情報の整理が正しくできぬままに行動してしまう現代の若者に、ついていける親たちが、どれだけいるのか疑問である。家庭や地域住民との協力による性教育が、今後の学校に課せられた大きな課題だと言えます。

東京都高等学校性教育研究会（高性研）は、昭和50年7月（1975年）に発足しました。

高性研設立当初は、まさに手探り状態であり、高等学校の生徒対象に性についてのアンケート調査を保健体育科の教員を中心に協力を得ながら出発しました。

代々の高性研会長の努力と全性連理事長の田能村祐麒先生の暖かいご支援ご指導をはじめ、私たちを熱心に指導していただいた会津一先生、竹井操先生の献身的なご尽力により着実に発展を遂げて参りました。

その後、都性研に加盟し、研究の幅を広げるとともに、各校種間と密接な連携による性教育の推進を目指しました。

また、活動のほとんどが会員のボランティア精神に助けられて、全国大会・関東ブロック大会・都性研発表会などへの積極的な参加と研究発表をおこなって参りました。

その甲斐あって、平成10年度に都高研連に加盟が認められ、高性研会員一同の願いが叶いました。

東京都高等学校性教育研究会副会長 小泉 功

この高研連加盟が、大きな弾みとなり公立、私立高校の性教育の推進に弾みとなるものと期待が膨らみます。

21世紀初頭の時期に、高校生の性の問題行動が減らせるように、これからの高校教育における性教育の在り方や指導方法を探り、それを、教科、ホームルーム活動、総合的な学習への位置づけを明確にして研究・実践を重ねていくことが会員の大きな課題である、と、考えました。

「三つ子の魂百までも」の言葉は、今でも十分に肝に銘ずる共通する大切なものだと思います。幼児期（思春期や小学・中学・高校1年も同様）に子供への注意深い指導を行うことが非常に大切なものです。ドミノ倒しのように一度小さなことを許容すると個人的にもどんどん駄目になっていきます。その上、周りの友人や教室にいるクラスメートが教師や親の指導や注意に耳を貸さなくなるエスカレーション現象が始まったらもう止まりません。そのために、地域社会・家庭を巻き込んで、親や教師に子供のしつけ方から指導方法を、今後、進めることが大切です。学校が地域教育の中心的な役割を自覚して先頭になり、努力することが必要だと思います。

教育課程の改善期であるこの好機に高性研として研究を深め、性教育を総合的な学習への組み入れに努力し、学校教育現場で指導しやすい教育方法を検討していきたいものです。

高性研の活動を広く知って貰うことを含めて、高性研会誌「あふるる」を発行することにしました。発行に当たっては、はじめが肝心との気持ちから、読者が満足のいく会誌になるように誠意を込めて作成しました。

「終わりのないはじまり」であり、これからの性教育を展望し、人間教育の観点から、21世紀を担う生徒へのメッセージを探り、高性研会員相互に研鑽に励み、成果を上げていきたい。今後の活躍を大いに期待して下さい。

あふるふ

第 1 号

発 行 平成 1 1 年 5 月
発行者 都高等学校性教育研究会

印 刷 (有) 梶 山 印 刷
03-3944-2941